



2024年度 異文化交流研修報告書

@マレーシア工科大学

はじめに

R.Kamijima

2024 年度の異文化交流研修（春季・マレーシア工科大学）は、約 3 週間のマレーシア・シンガポール滞在に加え、事前学習から事後の振り返りにいたるまでの長期間のプログラムであり、本報告書の完成をもってようやく研修全体を締めくくることができた。この場を借りて、研修に関わってくださったすべての方に心から感謝を申し上げたい。

この研修では、中国・インドネシアおよび日本の他大学からの参加者とともに、マレーシア工科大学（UTM）での講義やグループワークを通して環境に配慮した経済発展や持続可能な開発目標について理解を深めた。しかし、それだけがこの研修で学べることではない。3 週間もの共同生活における他者との交流を経て、私たちはまさにこの研修の名の通り、異文化との関わり方を見つめ直すことができた。マレーシアは多民族・文化が共生する特徴的な国である。渡航前の授業や課題を通して、ある程度の予備知識は身につけていたつもりだったが、実際に現地で様々な出自を持つ人々と関わる中で初めて気づかされたことも多くあった。渡航前には、マレーシアの社会や文化、異文化理解についての授業や課題を通して現地での学びをより深めるための準備を行った。また、一橋大学に在学しているマレーシア出身の留学生との交流や、経験豊富な塚田先生や UTS の上野様からアドバイスをいただける場面も多くあり、海外経験があまりない参加者にとっても安心して研修に臨める体制が整っていた。現地では、後述のスケジュールを参照していただきたいが、バディ制度のもとで講義やフィールドワークに臨んだ。授業内でのディスカッションや、日常生活のいろいろな場面を通じて価値観の違いを感じることができ、滞在中はすべての瞬間が学びをもたらす貴重な時間だった。研修期間にイスラム教の断食月であるラマダーンが重なったこともあり、宗教や文化の違いをより深く理解することができた。そのような色濃い 3 週間の時間をともにした仲間との間には、国境を超えて確かな友情が芽生え、最終日のお別れの時間には涙を流すメンバーの姿も見られた。

本報告書は、この異文化交流研修の全体像を記録し、振り返るものとなっている。現地での視察や授業の様子に加え、個人エッセイや座談会など参加者の多様な視点が盛り込まれた文書が多く、読み手にとっても現地の雰囲気や学びの深さが伝わるよう工夫されている。今年度からは、渡航前授業での話し合いをもとに、報告書の構成を一部見直した。参加者やバディの紹介の形式をよりわかりやすくしたほか、一橋生の参加者による座談会を新たに企画し、個人エッセイに参加者同士でコメントしあった。また、読者が興味のある箇所に素早くアクセスできるよう、目次から各ページへのリンクをつけている。次回以降も改良を重ね、よりよい研修および報告書になっていくことを願っている。

この報告書が、マレーシア工科大学での異文化交流研修に興味をもってくれた人の助けになればこれほど嬉しいことはない。

目次

参加者紹介.....	3
バディ紹介.....	5
UTM の基本情報.....	7
プログラム日程	9
渡航前グループ調査報告	10
多民族国家における教育のあり方.....	10
日馬関係の変遷と国民感情.....	17
マレーシアと日本のジェンダー格差.....	23
UTM での授業の様子	33
クアラルンプール視察.....	36
マラッカ視察	39
ジョホール視察	42
コラム① マレーシアの天候と服装について	45
コラム② 猫の国マレーシア	47
コラム③ 自動車大国マレーシア	49
コラム④ マレーシアの食事と文化.....	52
個人エッセイ	54
ルックイースト政策とタイムゾーン変更.....	54
ラマダーンから見るマレーシアの多文化共生	57
マレーシア人のメイクに学ぶ他者との共生	60
カラフルな国マレーシア	63
望ましい「自然」とは？	66
マレーシアで親しまれる日本文化.....	69
Mat Rempit と Bumps から考えるマレーシア人の性格.....	72
「境界」が織りなす共存の形.....	75
ゴミ箱のある街, ない街	78
オレオ流通の謎.....	81
約 40 円で病院に行けるマレーシアの医療制度	83
マレーシア異文化交流研修 座談会.....	86
次回以降の研修参加者のための Q&A.....	92
あとがき	94

参加者紹介

T.Matsuzaki

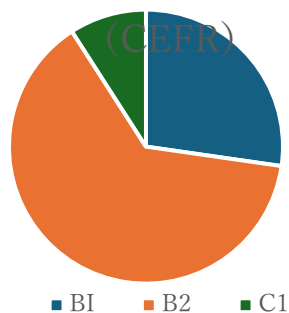
本稿では、本研修に参加した一橋大学の学生のプロフィールについて紹介する。一橋大学からの参加者は計 11 名であり、学年および学部の内訳は以下の通りである。

- 1 年生：2 名，2 年生：5 名，3 年生：1 名，4 年生：3 名
- 商学部：3 名，経済学部：5 名，社会学部：2 名，ソーシャル・データサイエンス学部：1 名

参加者の英語レベル

まず、参加者への本研修に関する事前アンケートの結果について紹介する（下の円グラフ参照）。まず、渡航前の英語力については、過半数の学生が CEFR の B2 レベルに該当すると回答した。B2 レベルは、一般的に英検準一級合格相当レベルであり、多少抽象的な話題であっても読んで理解したり、議論したりできる「自立した言語使用者」のレベルだとされている（文部科学省 2016）。本研修では、他国からの学生やバディとのコミュニケーションは主に英語で行われるため、一定の英会話能力は求められるものの、必ずしもネイティブのような流暢さは必要ない。実際には、多少拙い英語であっても、相手が理解しようと努めてくれることが多く、必要に応じてスマートフォンで画像や動画を用いるなど、工夫を凝らすことで十分に意思疎通を図ることができた。

渡航前の英語力レベル

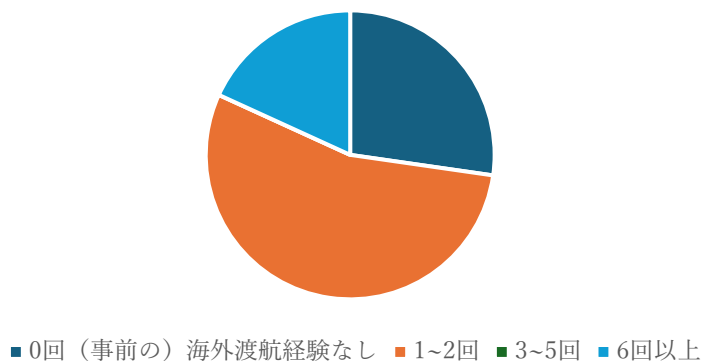


参加者の海外渡航経験

続いて、研修前の海外渡航経験については、参加者によって大きな差が見られた（下の円グラフ参照）。中には海外渡航経験が全くない学生もいたが、そのような学生であっても問

題なく研修に参加していた。もちろん、海外に慣れていることは有利に働く場面もあるだろうが、未経験であることを理由に参加をためらう必要はない。

事前の海外渡航回数



最後に

最後に、本研修への参加目的について紹介する。アンケートによれば、参加者全員が「異文化交流の体験」と「英語力の向上」を目的として挙げていた。マレーシアという多民族国家での生活を通して、「異文化理解とは何か」について関心を抱く学生が多く集まっていたことがうかがえる。また、自身の英語力を試し、さらに伸ばしたいという意欲も共通して見られた。実際マレーシアでは、英語が主な公用語として使用されており、街中では英語によるコミュニケーションが比較的容易であるため、英語を実践的に使う機会は非常に多かった。

さらに、「国際的な視野を広げたい」「現地の人々と積極的に交流したい」といった目的を持つ学生も多く見られた。そのほか、「マレーシアの歴史や経済、文化について学びたい」との具体的な関心を示す学生もいた。

このように、参加者の英語力や海外経験には幅があったが、いずれの学生も研修を通じて貴重な学びを得ていた。英語や海外経験に自信がない場合でも、少しでも関心があれば、積極的に挑戦してみることを強く勧めたい。

参考文献

文部科学省, 2016, 「各試験団体のデータによる CEFR の対照表」, (2025 年 4 月 5 日取得, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/117/shiryo/_icsFiles/afielldfile/2016/05/24/1368985_15_1.pdf).

バディ紹介

M.Irie

- ① 学年 ② 出身・人種または宗教 ③ 趣味 ④ 特技 ⑤ コメント



H.Hadif

- ① Bachelor 3rd year
- ② Islam
- ③ Driving a car / Listening to music
- ④ House jobs – vacuuming, cleaning the toilet
- ⑤ The hardest part of being a buddy is saying goodbye to your friends.

L.Sun

- ① PhD 1st year
- ② China, Shanghai
- ③ Playing games / Reading books / Listening to music/ Doing sports
- ④ Playing the piano / Writing essays
- ⑤ Be healthier, be happier every day.



U.Irfan

- ① Bachelor 3rd year
- ② Islam
- ③ Listening to music
- ④ Making latte art / Good voice
- ⑤ Japanese anime is the best. I'm a barista.

C.Wang

- ① PhD 1st year
- ② China, Henan
- ③ Playing basketball / Listening to music/ Watching movies
- ④ Cooking / Driving / Doing some sports (Basketball, Table tennis, skiing)
- ⑤ Getting to know each other is a fate. I hope you have a promising future.



H.Tan

- ① Master 3rd year
- ② Malaysia / Hinduism
- ③ Gardening
- ④ Mathematics
- ⑤ The program was wonderful as everyone got to know their culture, and we treated each other like family members.



Y.Fong

- ① Master 1st year
- ② China
- ③ Karaoke, playing a game
- ④ Singing a romance song from his heart
- ⑤ I am cute. I will miss you all!!

M.Yusup

- ① Bachelor 3rd year
- ② Malaysia / Islam
- ③ Guitar, studying, drawing, painting, running
- ④ Studying and teaching mathematics and chemistry
- ⑤ This program provided a valuable opportunity to enhance initiatives and deepen my understanding of different cultures.



H.Choo

- ① Master 2nd year
- ② Chinese Malaysian
- ③ Playing badminton
- ④ Sleeping
- ⑤ This program was a good experience to interact with people from different cultures.

UTM の基本情報

T.Matsuzaki

UTM について

私たちが本研修で訪れ、約 2 週間を過ごした University of Technology Malaysia (通称 UTM, マレーシア工科大学) は、マレーシアで最も歴史のある理系の国立大学である。マレーシアにおける科学教育は 1904 年から始まり、その後、さまざまな教育制度の変更や組織の統合を経て、UTM は 1975 年に正式に設立された (UTM 2024)。UTM 内の学部は機械工学や電気工学、コンピューター科学をはじめとする理系学部のほか、人文社会科学などの文系寄りの学部も存在し、全部で 13 の学部で構成されている (UTM 2024)。学生数については、2024 年度時点で約 25,000 人が在籍しており、そのうち約 17,000 人が学士課程、約 3,400 人が修士課程、約 4,500 人が博士課程に所属している。また、約 4,800 人の海外からの留学生も受け入れている。教員は約 5,000 人が所属しており (UTM 2024)、一橋大学の学部生 4,438 人、大学院生 1,880 人と比較すると (一橋大学 2024)、人数規模がかなり大きいことがわかる。

UTM のキャンパス

UTM は 3 つのキャンパスを持ち、ジョホールバルにメインキャンパスがあり、クアラルンプールとパゴにも分校がある (UTM 2024)。ジョホールバルのスカダイに位置するメインキャンパスの広さは 1,222 ヘクタールで (UTM 2024)、マレーシアの大学の中でも 2 番目に広いキャンパスを誇る。私たちがキャンパス内を移動する際は、バスに乗らないと移動できないほど広大であった。共に行動したバディも、自分で車を運転するか、Grab (マレーシアのタクシーサービス) を使用して移動すると話しており、日本の大学では徒歩で十分な広さのキャンパスに慣れている私たちには、その広さが印象的であった。

また、クアラルンプールの分校には、私たちが訪れた Malaysia Japan International Institute of Technology (マレーシア日本国際工科院、通称 MJIT) も存在する。MJIT は 2011 年に UTM の一部として設立され、日本の筑波大学、芝浦工業大学、東京農工大学などと提携し、協同研究や活発な人材交流を行っている (浜田 2022)。学部でも実践的な技能獲得を目指した実習や授業、日本企業へのインターンシップ、日本語の習得 (日本語検定 3 級目標) にも努めており、卒業生の就職率はほぼ 100% である (浜田 2022)。そのうち日系企業に就職し日本を含めた世界で活躍する生徒もいる (浜田 2022)。

UTM の世界ランキング

UTM は、2025 年の Quacquarelli Symonds (QS) World University Rankings で世界ランキング 181 位、アジア地域 28 位にランクインしている (UTM 2024)。本ランキング

において一橋大学は 539 位に位置する。やはり UTM は理系の国立大学であるだけに、その研究力の高さがランキングの上位という結果に如実に表れている。このランキングは、教育の質や研究の影響力、生徒の国際性や就職状況などを指標として約 1500 の世界の大学を対象に調査した結果をまとめたものだ。本ランキング結果から、世界でもトップレベルの大学であることが確認できる。またアジアの新しい大学のトップ 10 にも選ばれている (UTM 2024)。さらにアジア国際研究ネットワークランキングでは 9 位に位置するなど (UTM 2024)、国際的な交流が活発であることがわかる。実際、UTM は日本の複数の大学と学生交流協定を結んでおり、本研修もその一例だ。また、MJIIT とは別に、UTM は日本の大学と共同でプログラムを実施しており、その国際的な色彩を反映している。

参考文献

- 一橋大学, 2024, 「教員数・学生数」, (2025 年 4 月 5 日取得, https://www.hit-u.ac.jp/guide/data/pdf/data_g_1.pdf) .
- 浜田, 2022, 「マレーシア日本国際工科院 (Malaysia Japan International Institute of Technology) 概況」, (2025 年 4 月 5 日取得, <https://mjiit.utm.my/wp-content/uploads/2018/06/2.-MJIIT-At-Glance-Japanese-20220228.pdf>)
- 日本貿易振興機構, 2024, 「ジェトロ, マレーシアと日本国際工科院と日本企業のネットワークを開催」, (2025 年 5 月 4 日取得, <https://www.jetro.go.jp/biznews/2024/07/7ecd6fd104e26bef.html>) .
- QS Top Universities, 2025, “QS World University Rankings”, (Retrieved April 10, 2025, <https://www.topuniversities.com/qs-world-university-rankings>) .
- Universiti Teknologi Malaysia, 2024, “UTM campus” Universiti Teknologi Malaysia, (Retrieved April 5, 2025, <https://www.utm.my/about/utm-campus/>)
- Universiti Teknologi Malaysia, 2024, “Facts and Figures,” Universiti Teknologi Malaysia, (Retrieved April 5, 2025, <https://www.utm.my/about/facts-and-figures/>) .
- Universiti Teknologi Malaysia, 2024, “Faculties,” Universiti Teknologi Malaysia, (Retrieved April 5, 2025, <https://www.utm.my/about/faculties/>) .
- Universiti Teknologi Malaysia, 2024, “University Ranking” Universiti Teknologi Malaysia, (Retrieved April 5, 2025, <https://www.utm.my/about/achievements/>) .
- TALEEMINSIGHT, 2025, “QS World University Ranking Explained : Your Ultimate Goal” (Retrieved May 3, 2025, [https://www.taleeminsight.com/qs-world-university-rankings-2025/#:~:text=The % 20QS % 20World % 20University % 20Rankings % 20assess % 20teaching % 20quality % 2C , universities % 20rely % 20on % 20these % 20rankings % 20for % 20credible % 20comparisons](https://www.taleeminsight.com/qs-world-university-rankings-2025/#:~:text=The%20QS%20World%20University%20Rankings%20assess%20teaching%20quality%2C,universities%20rely%20on%20these%20rankings%20for%20credible%20comparisons)) .

プログラム日程

R.Yamada

一週目

2/15	7 pm クアラルンプール国際空港に到着
2/16	ツアー①KL Central Walking Trail
2/17	ツアー②MJIT を訪問
2/18	ツアー③ヤクルト
2/19	ツアー④バトゥ洞窟
2/20	マラッカに移動 マラッカ散策
2/21	マラッカ散策

二週目

2/22	UTM ジョホールバルキャンパスに到着
2/23	ジョホールバルシティツアー
2/24	コース紹介&グループワーク
2/25	Lecture1 SDGs について Lecture2 プレゼンの作り方
2/26	Lecture3 低炭素社会について Lecture4 SCP について
2/27	Kota Iskandar 訪問
2/28	Kukup Island 滞在

三週目

3/1	UTM に戻る
3/2	Free day
3/3	Lecture5
3/4	Malay Cultural Village 訪問
3/5	Group Discussion
3/6	Group Presentation
3/7	シンガポール観光

渡航前グループ調査報告

多民族国家における教育のあり方

——三つの側面から——

R.Kamijima, S.Nishina, A.Morita

はじめに

近年日本では移民が増えており、教育現場ではマイノリティの人々が言語や宗教の問題から困難を抱えている。そこで、多民族国家であり、長くにわたってそうした問題に直面してきたマレーシアの教育のあり方に注目したい。しかし、教育という大きな問題を扱う都合上、それを分解して理解する必要がある。したがって、本プロジェクトでは教育現場での宗教の扱い、教育現場用いられる多様な言語、教育に大きな影響を与えたブミプトラ政策の三つをサブトピックとして設定して論じる。また、分解したサブトピックごとに日本への示唆が存在しないか考察する。

教育現場における宗教の扱い

マレーシアの宗教分布はイスラム教が 64%、仏教が 19%、キリスト教が 9%、ヒンドゥー教が 6%となっている(外務省 2024)。なかでも国民の半数以上が信仰しているイスラム教は特に戒律が厳しく、1 日 5 回の礼拝や礼拝前の洗浄、豚肉およびアルコールを口にしないことなど日常生活の中でも制約が多い。そのため、マレーシアの学校ではムスリムの人々の信仰に配慮した教育の環境が整備されている。ここでは、教育の現場において宗教というセンシティブな問題が、多民族国家であるマレーシアにおける扱い方をみる。そして、それを参考に信仰の自由が保障されている日本においてもすべての人がストレスなく学べる環境をつくる道を模索していきたい。

そもそも、マレーシアには日本のような義務教育はない。あくまでも任意教育ではあるが初等及び中等教育は無償で受けることができる。後の項で詳しく述べるが、初等教育を行う小学校には、マレー語を教授言語とする国民学校と中国語やタミル語を教授言語とする国民学校の 2 種類がある。中国語学校やタミル語学校といった国民型小学校で学んだ児童については下級中等学校に進学する前に 1 年間の「移行学級(Remove Class)」での学習が義務づけられるため、中国系・インド系であっても初めから国民小学校へ通わせる例も多いという。中等教育になると、その大部分はマレー語を教授言語とする国民中等学校によって担われるようになる(自治体国際化協会 2001)。このため、教育現場においても多様な人種が混じり合う環境にある。

マレーシア教育省が発表しているカリキュラムを参照すると、上記の初等・中等教育では「イスラム教育」が施されていることがわかる。教育省の予算でも全体の 0.6%が「イスラム・道徳教育」に充てられている(自治体国際化協会 2001)。これは数値で見るとわずかにも思えるが、ひとつの分野として成立していることからこれらの道徳教育の立ち位置が窺える。この「イスラム教育」の授業の間に、イスラム教徒以外の子供たちは代替として「道徳教育」という授業を受ける。これら「イスラム教育」「道徳教育」は小学校で平均週 4 時間(240 分)ほどの時間を占めており、日本の小学校での道徳教育が年間 35 時間に過ぎないのに比べると格段に多い。それにも関わらず、都市部ではムスリム小学生のおよそ 90%が小学校での授業に加えてモスクなどで毎日 3 時間ほど宗教の勉強をする(久志本 2016)。この宗教教育では神学、法学、道徳・神秘主義の 3 つの主要な分野がある。そしてその基礎として、聖典クルアーンの読み方や解釈、預言者の言行録(ハディース)に関する学問、アラビア語に関する学問なども学ぶ(久志本 2016)。一方、道徳教育では、さまざまなバックグラウンドを持つ学生たちの絆を深めることが重要視され、正義・利他主義・統一感などの価値観を育むことに重点を置いている(Prime Minister's office of Malaysia 2019)。

次に、学校生活の実態を見る。ここでは、ある全寮制中等学校(トゥンク・アブドゥル・ラーマン学校)の事例を参考にしたい。この学校では、1 学期は 1 月から 5 月まで、2 学期は 6 月から 11 月までとなっており、2 学期終了後のスクールホリデーにイスラム教の断食月が当たるようになっている。一日はアラーへの礼拝から始まり、金曜日には集団礼拝が行われるため午後からの授業はないという(自治体国際化協会 2001)。また、別の学校の例にはなるが、学校の食堂ではハラール文化に配慮した食事が提供されている(SISM 2024)。

これらの考察をもとに、日本の教育現場でどのように宗教を扱うべきか考える。日本においても少数ながら、私立の仏教系・キリスト教系などの学校は存在している。しかし、多くの場合宗教については社会科の授業で「遠い事実」として学ぶだけになっている。小学校における道徳の授業がマレーシアに比べて格段に少ないという話もあったが、日本で宗教および道徳教育に割く時間を増やすことは本質的ではないだろう。もちろんそれぞれの宗教の制約を学ぶことは、他者理解を促す点で有用であり、日本ではその機会を増やす余地がある。しかし、無宗教の人が多いこの国でカリキュラムを変更することは、他国からの生徒の流入が少ない地域では必要性があまり理解されないであろうし、日本で暮らすイスラム教徒およびその他の宗教の信者の生徒はより実践的なアプローチを必要としているのではないだろうか。

その例として、給食でハラールフードを選択できるようにすることが挙げられる。多くの小学校では食物アレルギーをもつ児童には代替りの食事を提供するなどして対応している。同じように、宗教上の理由での食べ物の制限にも配慮することはできるのではないだろうか。それが難しければ、弁当の持ち込みを許可しても良いだろう。礼拝についても、

授業時間をそれに完全に合わせることは難しくても、自由に授業を抜けて礼拝をすることを許し、それを他の児童に不公平感を感じさせない工夫をするべきではないか。宗教や文化の多様性が教育現場に与える影響は、単なる課題ではなく、教育の幅を広げる絶好の機会でもある。マレーシアの実例が示すように、多文化教育は他者理解と自己成長を促進する可能性を秘めている。日本もまた、こうした視点を取り入れ、全ての生徒が公平に学び合える環境を築いていくべきだ。

教育における言語の多様性

このサブトピックでは、コミュニケーションにおいて必要不可欠であり、教育においても重要な存在である言語に注目する。マレーシアにおける言語教育に関して野口（2022）は、国民統合のための「国語教育」、各民族のアイデンティティ構築を目的とする「母国語教育」、グローバル社会での競争力の維持・向上を目指す「英語教育」の3つを必要不可欠なものとして取り上げている。以下では上記した3つの教育を維持・向上させるために何が重要な役割を果たしているのか考察するために、教授言語の歴史と国語教育、英語教育に注目して論を進める。

まず、教授言語をめぐる歴史について述べる。18世紀後半から始まったイギリスの植民地化により、英語はマレーシアに「移植」され、教育の場で英語が浸透した（小野 2009）。戦後の教授言語に関して杉村（2021）は、1961年教育法で初等教育機関を除くすべての学校で英語ではなくマレー語を教授言語にすることが定められたと述べている。なお初等教育では、マレー系・中華系・タミル系の3民族は民族別の学校に通うことができるため、母国語で学ぶことができる。マレーシアの国語はマレー語であるが、6年間通う初等教育機関で母国語を使うことができるため、少数民族のアイデンティティが尊重されると考えられる。

次に、非マレー人に対する国語教育について論じる。前の段落で述べた通り、初等教育機関では各民族が母国語を教授言語にしているが、国語はマレー語であるため、非マレー人へのマレー語教育は非常に重要である。もちろんどの初等教育機関でもマレー語教育が国語教育として行われるが、本プロジェクトでは特に、非マレー人へのマレー語教育で大きな役割を果たすものとして **Remove Class** に注目したい。これは、中等教育機関への進学前に行われる試験でマレー語の理解が不十分だと判断された学生に対し、一年間補修を受けさせる制度だ（文教大学 2022）。**Remove Class** は、国語教育において落ちこぼれる学生を生まないためのセーフティネットであると考えられる。

さらに、英語教育について述べる。独立後に英語は国語ではなくなったものの、現在でも日常生活やビジネスの場の多くでは英語が用いられる（江藤 2019）。この事実からわかるように英語教育は重要であるが、英語の効果的な教育のため、以下で見るような交流活動が大きな役割を果たしている。日本人学校に勤めたことのある野口は、その学校がイギリス系・中華系の学校と英語で交流する行事を開催していたと述べている。そして、終

了後のアンケートでは、8割の生徒が「楽しかった」と回答していたという。このように、母国語でない英語を用いて他民族と意思疎通をすることに楽しさを感じた経験によって、生徒が持つ英語を学ぶモチベーションはさらに高まると考えられる。

これまでみてきたように、国語教育を確かなものにするために **Remove class** が、母国語教育において初等教育機関が、英語教育の質を向上させるために実践的な場を設ける工夫が大きな役割を果たしていることが明らかになった。最後に、日本語教育をめぐる問題を取り上げ、その解決のために日本版 **Remove Class** が大きな役割を果たすのではないかと主張する。日本語を完全に習得していないのにもかかわらず、教授言語を日本語とする学校に通う生徒は2018年時点で50,000人以上いる（文部科学省 2020）。教授言語を完全に習得していなければ、教われている内容の理解がままならないだけでなく、その生徒が教室に馴染むことも困難になると考えられる。そこで、**Remove Class** の日本版を導入することが、こうした生徒の日本語習得に役立つと考えられる。具体的には、編入や入学を問わず、学校に通い始める前に日本語の習熟度を調査し、補修が必要だと判断された場合には日本版 **Remove Class** で日本語教育を行ってから教室に参加する、というものだ。このような制度があれば、言語に困難を抱える生徒の苦しさを和らげられると考えられる。

ブミプトラ政策と教育

マレーシアの教育を語る上で欠かせない政策が、マレーシア語で「土地の子」を意味する「ブミプトラ」すなわちマレー系住民の経済的・社会的地位の向上を目指す「ブミプトラ政策」である。マレー系・中華系・タミル系住民など、さまざまな民族で構成されるマレーシアにおいて、長年顕著に経済的不利であったマレー系住民を優遇し、格差是正を図る政策である。

まず、政府は大学入学枠においてマレー系を優遇している。大学入学者の民族別構成比について、ブミプトラが55%、非ブミプトラが45%（中華系が35%、タミル系その他が10%）を占めるよう調整することが、1979年に合意された（Boo 1998）。その上、その構成比は合意された比率を上回る結果となった。1970年には40.2%だったブミプトラ学生は、1980年には62.0%となり、49.2%だった中華系は29.7%に減少した。（左右田 2009）これは実質的に、ブミプトラ学生のための特定の入学枠が設けられたことを意味する。こうしてブミプトラの高等教育進学率が向上した一方で、非ブミプトラ（主に中華系やタミル系）は競争が激化した。文部科学省（2009）は『マレーシア調査報告』の中で、国立大学における非ブミプトラの進学機会の減少が、海外大学への留学や国内の私立大学への進学を促していることを指摘している。実際、ユネスコ（1989）の統計によると、1981～1988年にマレーシアは世界最多の留学生を送り出し、これは非ブミプトラの進学制限が影響したと文部科学省（2009）は指摘している。

また、ブミプトラの教育レベルを引き上げるために、教育機関が数多く設立された。この主体となったのがMARA（Majlis Amanah Rakyat）委員会である。厚生労働省

(2015) の調査によると、MARA はブミプトラの教育や就労推進のために設けられた地方地域開発省の下部組織であり、マレー人の支援のため、全国 20 ヶ所以上に大学や職業訓練施設を展開している。Lee (1994) によると、政府はブミプトラ専用の教育機関を開設し、入学と奨学金を人種別に割り当てた。1970 年代半ばから理工学分野がより重視されるようになると、教育省は、ブミプトラ専用の全寮制科学大学を設置した。MARA は、ブミプトラの学生を優先した奨学金や教育ローンなどの経済的支援も行っている。これは経済的に困難な状況にある地方のブミプトラ学生にとって大きな恩恵をもたらしたが、中華系やタミル系学生の間では不公平感を訴える声もあった。そこで、2009 年、当時のマレーシア首相ナジブ・ラザク氏は、政府の奨学金制度において、成績優秀な学生に対して人種や宗教に関係なく奨学金を提供する「National Scholarship」制度を導入することを発表した。しかし、その後の報告によれば、奨学金制度では依然としてブミプトラへの優遇が続いており、非ブミプトラからは公平性についての議論が続いている（小野沢 2009）。

このように、ブミプトラ政策は、マレーシアにおける教育機会の拡大とブミプトラの社会経済的地位の向上に寄与したが、同時に、制度の公平性や実力主義の観点からの議論を生んでいる。

マレーシアはブミプトラ政策により、特定の民族グループに対する経済的・教育的支援を行い、社会の均衡を保とうとしてきた。一方、日本では戦後の義務教育制度において全国一律の学習指導要領が適用され、「均質な教育」が重視されてきた。かつて日本社会は、政治的・文化的に「均質である」と語られることが多かった。しかし実際には、在日外国人、アイヌ、琉球の人々など多様な文化的背景を持つ人々が古くから暮らしており、その存在はしばしば見過ごされてきた。近年、外国人労働者やその子どもたちの増加により、こうした多様性がより可視化され、すべての生徒に適した教育を提供するための施策が求められている。

例えば、外国にルーツを持つ子どもや、社会経済的に不利な環境にある子どもへの特別な教育支援の必要性が指摘されている。これらの支援は、教育格差の是正という点でブミプトラ政策と一部共通する発想に基づくが、マレーシアの政策が民族的優遇を中心とするのに対し、日本では文化的・経済的な背景を問わず、教育の公平性を重視する傾向がある。また、日本では自治体ごとに日本語支援の拡充や学習サポートが行われているものの、国として統一的な制度はまだ確立されていない。こうした現状を踏まえ、ブミプトラ政策の効果と課題を検討することは、日本における教育機会の格差是正の方策を考える上で有益だろう。

おわりに

本稿では、多民族国家マレーシアの教育を宗教・言語教育・ブミプトラ政策という三つの側面から調査し、日本への示唆を考察した。具体的には、Remove Class のような、他民族に対する国語教育のための制度や教室における宗教的多様性など、日本の教育現場には

ないものが見つかった。その一方で、ブミプトラ政策のように特定の集団を優遇する仕組みには公平性の観点における課題があることがわかったため、マレーシアで実施されている制度を日本にそのまま適用することは慎重であるべきだと考えられる。このように、異なる国の制度を比較することは、単なる模倣ではなく、自国の課題を見つめ直し、改善のヒントを得ることに意味があるといえる。

参考文献

- 外務省, 2024, 「マレーシア基礎データ」, 外務省ホームページ, (2025 年 1 月 14 日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>)
- 一般財団法人自治体国際化協会, 2001, 「マレーシアの教育」『Clair Report』217, (2025 年 1 月 14 日取得, http://www.clair.org.sg/j/wp-content/uploads/2018/03/rep_219.pdf)
- Prime Minister's office of Malaysia, 2019, "Malaysia Education Blueprint 2013-2025," Prime Minister's Office of Malaysia Official Website, (2025 年 1 月 25 日取得, <https://www.pmo.gov.my/wp-content/uploads/2019/07/Malaysia-Education-Blueprint-2013-2025.pdf>)
- 久志本裕子, 2016, 「知識探訪 多民族社会の横顔を読む」『The Daily NNA マレーシア版【Malaysia Edition】』第 05682 号, 2025 年 1 月 14 日取得, http://jams92.org/essay/20160126_kushimoto.pdf)
- Soka International School Malaysia, 2025, 「SISM での日常生活 食堂」, SISM ホームページ, (2025 年 1 月 25 日取得, <https://sism.edu.my/ja/life-at-sism/cafeteria/>)
- 野口美紀子, 2022, 「マレーシアの英語教育の実際と国際理解教育の実践について」在外教育施設における指導実践記録, 40, 87-91
- 小野礼子, 2009, 「マレーシアの英語・発音・文法・語彙の特徴」神戸海星女子学院大学研究紀要, 47, 1-14
- 杉村美紀, 2021, 「言語教育政策をめぐるマジョリティとマイノリティ：多民族社会マレーシアの英語教育政策の事例」坂本光代編『多様性を再考する：マジョリティに向けた多文化教育』上智大学出版, 34-54
- 文教大学教育研究所, 2022, 「マレーシアの教育制度」(2025 年 1 月 31 日取得, <https://www.bunkyo.ac.jp/faculty/kyouken/wp/wp-content/uploads/2022/11/1-1.pdf>)
- 江藤裕之, 2019, 「シンガポール, マレーシア, 香港における英語環境と英語教育支援—日本人の英語を考えるヒントとして—」21 世紀アジア学研究, 17, 79
- 文部科学省, 2020, 「「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成 30 年度)」の結果について」(2025 年 1 月 25 日取得,

- https://www.mext.go.jp/content/20200110_mxt-kyousei01-1421569_00001_02.pdf)
- Lee Kiong Hock, 1994, “Human Resources and Skill Development, ”Shamsul Amri Baharuddin, Asmah Ahmad and Abdul Razak Bokhari eds ., *Malaysian Development Experience: Changes and Challenges*, Kuala Lumpur : INTAN, 819–852.
- Cheng Hau Boo, 1998, *Quotas Versus Affirmative Action: A Malaysian Perspective*, Kuala Lumpur : Oriengroup.
- UNESCO , 1989, *Statistical yearbook*, Paris : UNESCO Publishing.
- 厚生労働省, 2015, 『2015 年海外情勢報告』(2025 年 1 月 26 日取得, <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/16/dl/t5-03.pdf>).
- 山本眞一 , 2009, 「マレーシアの国レベルでの高等教育国際化戦略」『マレーシア調査報告』文部科学省, 157-191 (2025 年 1 月 14 日取得, https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/06/22/1257659_005.pdf) .
- 左右田直規 , 2006, 「マハティール政権期の高等教育改革—国家構想・政策転換・政治論争—」『マハティール政権下のマレーシア—「イスラーム先進国」をめざした 22 年—』日本貿易振興機構, 261-304 (2025 年 1 月 25 日取得, <https://doi.org/10.20561/00042705>).
- 小野沢純, 2009, 「マレーシアのナジブ新政権とブミプトラ政策の行方」『国際貿易と投資』国際貿易投資研究所, 77 : 87-105, (2025 年 1 月 25 日取得, <https://www.iti.or.jp/kikan77/77onozawa.pdf>).

日馬関係の変遷と国民感情

H.Isono, N.Hamanaka, I.Yamashita, T.Matsuzaki

はじめに

本研修においてマレーシアの人々と交流するにあたり、同国がこれまで歩んできた歴史を理解することは、その文化を深く理解するうえで不可欠だ。本稿では、マレーシアの人の歴史を概観するとともに、特に日馬関係の変遷及びそれに伴うマレーシアの人々の対日感情の変化に焦点を当てて論じる。

東南アジア交易の要衝としてのマラッカと植民地支配の始まり

マラッカ王国は 15 世紀初頭から東南アジアにおける重要な交易拠点として栄えていた。1511 年、ポルトガルがマラッカを征服し、東南アジアにおける最初のヨーロッパ植民地となった。この時期のマラッカには、アジア各地からの商人が集まり、活発な交易が行われていた (Zainal Abidin 1983: 28)。特に 16 世紀から 17 世紀初頭にかけての朱印船貿易時代には、日本商人もマラッカに来航し、香辛料や織物の交易を行っていた。当時の記録には、日本人町の存在も記されている (阪巻 1964)。1641 年、オランダ東インド会社がポルトガルからマラッカを奪った。オランダは香辛料貿易の独占を目指し、マラッカ海峡の支配を強化した (Zainal Abidin 1983: 32)。この時期、マレー半島の各地には独立したスルタン国家が存在し、それぞれが自治を保っていた。しかし、1639 年の日本における鎖国政策により、日本とマラヤ地域との直接的な交易は途絶し、約 200 年にわたり、両地域の直接的な接触はほとんど見られなくなった。

19 世紀に入ると、イギリスの影響力が急速に拡大した。1824 年の英蘭協約により、マレー半島とシンガポール、ボルネオ島北西部がイギリスの勢力圏となった。イギリスは間接統治方式を採用し、錫鉱山開発やゴムのプランテーション経営を推進した。1867 年に海峡植民地を設立し、1895 年にはマレー連合州が形成された。20 世紀初頭には、錫とゴムの生産で世界有数の地位を確立した。この過程で多くの中国人やインド人労働者が流入し、現代マレーシアの特徴である多民族社会の基礎が形成された (Zainal Abidin 1983: 57)。一方で、この時期日本は明治維新を経て、南進政策の一環としてマレー半島への経済的進出を開始した。

しかし、1941 年 12 月の太平洋戦争勃発とともに、状況は一変する。日本軍がマレー半島に侵攻し、1942 年 2 月のシンガポール陥落後、1945 年まで日本軍政が敷かれた。この時期、特に中国系住民への弾圧や強制労働など、過酷な支配が行われた。一方で、この日本軍政期の経験は、マレー民族主義を刺激し、独立への機運を高める一因となった (Zainal Abidin 1983: 97)。

独立への道と民族間の緊張

1946 年、イギリスはマラヤ連邦を設立したが、新体制はマレー人の権益を損なうものであり反発を招いた。その結果、マレー民族主義が高まり、UMNO (United Malays National Organization) が結成された。1948 年の再編により、マレー王権の地位は保証されたものの、市民権獲得の条件が厳格化されたため、非マレー人の不満が増大した (坪井 2019: 65)。熊谷 (2024) によると、日本占領期の統治政策が民族間の緊張を深める要因となったという。例えば、日本は華人を弾圧した一方で、インド人の支持を得る政策を採用するなど民族間の分断を助長した (熊谷 2024: 60)。こうした不満は共産主義勢力の台頭にもつながり、1948 年には非常事態宣言が発令されゲリラ戦が続いたことで、イギリスの支配は不安定なものとなった (坪井 2019: 67)。マレーシアの形成過程は、外部勢力の介入や統治政策によって民族間の関係が大きく左右され、それが政治的不安定を招く要因となっていたことがわかる。

1957 年にマラヤ連邦はついに独立を果たし、民族共生政策が推進された (久志本 2024: 41)。しかし、1963 年にシンガポールなど 3 州を加えてマレーシア連邦が成立すると、民族間の経済格差や政策の対立が表面化し、1965 年にはシンガポールが分離独立した (熊谷 2024: 45)。その後も民族間の意識のずれは解消されず、共産主義勢力との対立も続き断続的な闘争が繰り広げられた。こうした過程は、民族間のバランスを維持するための政治・経済の公平な仕組みが安定した国家形成に不可欠であることを示唆している。

戦後の日馬関係について見ると、経済成長が進む一方で、戦争を経験した世代の中には日本への否定的な感情を持つ人も少なくなかった。特に、1974 年に田中首相が ASEAN 諸国を歴訪した際、マレーシアでも反日デモが発生し、日本に対する根強い反発が存在していたことが確認できる (アジア経済研究所 1975: 370)。若月 (2000) によると、これを受けて日本は福田ドクトリンを掲げ、対 ASEAN 外交の強化を図った。一方で戦後の賠償問題は依然として民族間の摩擦を引き起こす要因となり、特に華人の不満が解消されることはなかった (熊谷 2024: 45)。このことから、戦争の記憶が一定期間にわたって外交関係や民族間の感情に影響を及ぼし、経済協力だけでは歴史的なわだかまりを完全に解消することは困難であることを示していると言える。

こうした史実を踏まえると、戦後の日馬関係は経済協力が進んだものの、戦時中の強制労働や献金問題の未解決等の課題が影を落とし、完全な和解には至らなかったことが分かる。マラヤからマレーシアへの歴史は、植民地支配の影響を受けながらも、民族間の対立やイデオロギーの違いを乗り越え、近代国家としての在り方を模索した過程であったのだろう。国家の安定には単なる政治的独立のみならず、民族間の公平な関係構築が不可欠であることを戦後のマレーシアの歴史が示している。

ルックイースト政策と経済協力の深化

1982 年から、マハティール首相によるルックイースト政策が開始された。その目的は、

日本や韓国の「労働倫理，勤労意欲，道徳，経営能力を学ぶことによって経済・社会の発展を目指す」ことであった（青山 2024： 1）。特に力が入れたのは，マレーシアから日本に留学生や職業人を派遣する事業である。これまでに，「2 万 6 千人以上が日本で学び，日本式高等教育や経済・経営面における日本の考え方や方法をマレーシアに伝えた」とされている（青山 2024： 1）。

人材派遣以外にも，両国は経済的に提携してきた歴史があり，日本からマレーシアへの援助総額は 2014 年度までに累計 1 兆 1, 170 億円とされている（外務省 2016）。1980 年代末から 1990 年代前半には，電子・電機産業を中心に，マレーシアに多くの日本企業が進出し，日本企業のマレーシア進出は，「マレーシアの輸出志向工業化に貢献」した（熊谷 2024： 46）。熊谷（2024）によると，一時期は，日本で売られているテレビやラジカセ等の家電製品の多くがマレーシア製という時代があったという。

その後も，継続的な経済的支援が行われた。1997 年にアジア通貨危機が発生し，マレーシア経済も大きな影響を受けた際には，日本はマレーシアを含む東南アジア諸国に金融支援を行い，経済的な結びつきをさらに強化した。（外務省 2016）

ここで，外務省（2002）が 2002 年 5 月から 9 月にかけて実施した ASEAN6 ヶ国に対する対日世論調査を参照する。本調査によると，マレーシア国民は日本に対して総じて好意的な印象を持つ傾向があることが分かった。また「マレーシアと日本は友好関係にある」または「どちらかというとも友好関係にある」と答えた人は合計で 93%に達した。さらに，日本についてもっと知りたい分野として「経済」を選んだ人が 33%で最も多く，次いで「科学・技術」を選んだ人が 32%にのぼった。これらの結果から，日本との友好関係を認識する人が多い一方，日本経済や科学技術への関心の高さは，ルックイースト政策の影響を強く受けていると考えられる。一方，第二次世界大戦中の日本について「悪い面はあったが，今となっては気にしない」と答えた人が 50%，「悪い面を忘れることはできない」と答えた人が 22%であった。ルックイースト政策を経た 2002 年時点でも，半数の人が日本の占領の歴史を「気にしない」とする一方で，約 2 割の人が「忘れることはできない」と感じていることが分かる。この結果は，負の歴史が人々の記憶から簡単に消え去らないことを示しており，日本に対する国民感情に一定のネガティブな影響を与えていると言える。

相互協力時代への転換

2000 年代には，日本からマレーシアへの一方的な支援という枠組みから，相互協力に基づく経済連携へと転換した。

両国の双方向の国際協力は，2006 年に発効された日マレーシア経済連携協定が最初であった。この協定は，二国間の貿易について，投資を拡大するとともに自由化を進めることを目的としたものであり，関税の撤廃・削減や知的財産の保護，マレーシアから日本への留学生・研修員の受け入れなどを定めた。これは主に関税の撤廃を行う自由貿易協定

(FTA) と比べても、より多くの条項を定めるものであり、マレーシアとの非常に強い結びつきを作ろうとする日本政府の意図が感じ取れる。発効後、この協定はおおむね順調に実施されている。例えば、マレーシア日本国際工科院は協定の成功を象徴する事例の一つである。これは日本の政府、大学の協力のもとマレーシアに作られた高等教育機関であり、マレーシアの学生に日本型の工学教育を施すとともに、これにより育成した優秀な人材を窓口とし両国間の交流を進めようという目的を持っている。実際に多くの卒業生が日系企業に就職しており、高度教育を受けた優秀な人材が二国間で交流しているといえる。

また日本政府としては、他の ASEAN 諸国とも経済連携協定を結び、巨大経済圏を形成して東アジア地域の発展を目指すという意図もあった。今回の協定は、そのための他国との交渉に向けた事前準備でもあり、これを交渉材料として ASEAN 諸国との協定を結ぶという計画であった。日マレーシア経済連携協定以降は、両国の相互協力体制が強化されていった。代表的な出来事として、2015 年の戦略的パートナーシップについての共同声明発表があげられる。これにより両国の首脳は、防衛や経済連携、教育といった様々な面での協力の体制を再確認した。また 2023 年にはパートナーシップの認識を改め、より重要度の高い「包括的・戦略的パートナーシップ」へと格上げすることが決まった。

2017 年に外務省が実施した ASEAN6 ヶ国の対日世論調査によると、両国の関係について友好関係、またはどちらかというとも友好関係だと答えた人が 87% おり肯定的である。日本を信頼できる理由に、70% の人が「経済的結びつき（日本の投資や良好な貿易関係）」を挙げており、ルックイースト政策や資金協力による支援、日マレーシア経済連携協定の効果が大きいと考えられる。また日本へのイメージは、「豊かな伝統と文化を持つ国」が 65%、「アニメ、ファッション、料理など新しい文化を発信する国」が 48% となっており、日本の伝統文化やポップカルチャーへの関心が強いといえる。

以上から両国の協力は順調に思えるが、他の側面から考察するとそうでない部分も見える。同調査の「最も信頼できる国」を問う質問では、30% で最多得票の中国に対し、日本は 9% にとどまった。また、日本に対し「戦後一貫して平和国家の道を歩んできた国」のイメージを持つ人は 36% にとどまっている。日本の文化や観光への関心、憧れは非常に強いが、一方で日本そのものへの印象は良いとは言えず、外交では中国のほうが重視されている。また調査対象は 18～59 歳であり、第二次世界大戦中に日本による占領を経験した高齢者は含まれていない。よって、この調査結果がマレーシア人全体の国民感情を代表するものとはいえない。ここに 60 歳以上の高齢者が加わった場合、占領の悪印象により、日本への評価は下がるだろう。

また、マレーシア国家の政策や態度は、同国民一人一人の感情と必ずしも一致しない。1981-2003 年と 2018-2020 年（計 24 年間）の長期間にわたり首相を務め、ルックイースト政策を提唱したマハティール元首相は、非公式を含め来日回数 100 回以上といわれるほどの親日家である（熊谷 2014）。熊谷（2014）は、マレーシアが「新日」な国だと捉えられる要因が、「マハティールの親日家ぶりと在任期間の長さから、しばしばマレーシア

という国の対日感情がマハティール個人の日本に対する態度と同一視され」やすいためだと指摘している（熊谷 2014: 58）。

おわりに

現在、両国の関係は経済協力にとどまらず、教育や文化交流を含む幅広い分野に広がっている。ルックイースト政策を通じて経済的・人的なつながりが強化されたことで、マレーシア国民の多くが日本に好意的な印象を抱いている。一方、第二次世界大戦中の日本の占領期における負の歴史を背景に、一部では否定的な感情が残っていることも否めない。こうした歴史的背景を踏まえ、物事を多角的に捉える姿勢が求められる。

マレーシア研修では、こうした歴史的・文化的な背景を十分に理解した上で、現地の学生との交流を深めたい。特に、日本の歴史や価値観の受け止め方は個人によって異なることを意識し、対話を大切にする姿勢が重要である。自分が相手を理解したつもりにならず、常に学ぶ謙虚な姿勢を持つことが求められると考える。

参考文献

Zainal Abidin bin Abdul Wahid, Datuk. 1983. *Glimpses of Malaysian history*.

Yamakawa Shuppansha.

Sakamaki, Shunzō. 1964 "Ryukyu and Southeast Asia." *Journal of Asian Studies*. vol. 23 no. 3, pp. 382-4.

高橋正樹, 2016, 「英仏植民地主義及び日本の南進政策とタイの領域主権国家化」『国際フォーラム』No26-06(2025年1月22日取

得, https://nuis.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=2703&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1)

坪井裕司, 2019, 「マラヤの脱植民地化と歴史の見直し——マレー・ムスリムの視角から」『マレーシア研究第7号』: 65-78, (2025年1月23日取得,

[http://jams92.org/pdf/MSJ07/msj07\(065\)_tsuboi.pdf](http://jams92.org/pdf/MSJ07/msj07(065)_tsuboi.pdf)).

熊谷聡, 2024, 「マレーシア経済と日本——高所得国同士の互惠関係を目指して」

『ASEANと日本——変わりゆく経済関係』: 44-67, (2025年1月23日取得,

https://www.ide.go.jp/library/Japanese/Publish/Reports/Kidou/pdf/2023_asean_02.pdf).

久志本裕子・鴨川明子, 2024, 「マレーシアの教育の歴史と現状——先行研究に見る国民統合とグローバリゼーション」『マレーシア研究第13号』: 34-54, (2025年1月23日取得, [http://jams92.org/pdf/MSJ13/msj13\(034\)_kushimoto.pdf](http://jams92.org/pdf/MSJ13/msj13(034)_kushimoto.pdf)).

アジア経済研究所, 1975, 「1974年のマレーシア——政権強化と農民・学生のデモ」『アジア動向年報 1975年版』: 365-411, (2025年1月22日取得,

<https://ir.ide.go.jp/records/39352>).

- 若月秀和, 2000, 「福田ドクトリン ——ポスト冷戦外交の「予行演習」」『国際政治第 125 号』『民主化』と国際政治・経済』: 197, (2025 年 1 月 23 日取得, https://www.istage.jst.go.jp/article/kokusaiseiji1957/2000/125/2000_125_197/pdf/-char/ja).
- 青山侑, 2024, 「ルックイースト政策の光と影——クアラルンプール, マラッカ, プトラジャヤ調査結果」, (2025 年 1 月 22 日取得, <https://urban-institute.info/wp-content/uploads/2024/08/08b69cf1a862dbc9eb0b0b816500be7d.pdf>).
- 外務省, 2002, 「ASEAN 諸国における対日世論調査」, (2025 年 1 月 22 日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asean/yoron.html>).
- 外務省, 2007, 「ASEAN10 か国における対日世論調査」, (2025 年 1 月 22 日取得, https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_005211.html).
- 外務省, 2016, 「国・地域別に見る日本の国際貢献データ (アジア編)」, (2025 年 1 月 22 日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/others/pdf/asia.pdf>).
- The ISEAS-Yusof Ishak Institute, 2023, “THE STATE OF SOUTHEAST ASIA 2023 SURVEY REPORT”, (2025 年 1 月 22 日取得, <https://www.iseas.edu.sg/wp-content/uploads/2025/07/The-State-of-SEA-2023-Final-Digital-V4-09-Feb-2023.pdf>).
- 外務省, 2023, 「包括的・戦略的パートナーシップに関する日・マレーシア共同声明 (仮訳)」, (2025 年 1 月 22 日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100596111.pdf>).
- 外務省, 2015, 「戦略的パートナーシップについての日本・マレーシア共同声明 (仮訳)」, (2025 年 1 月 22 日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000081944.pdf>).
- 外務省, 2006, 「日マレーシア経済連携協定」, (2025 年 1 月 22 日取得, https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/fta/j_asean/malaysia/index.html).
- AsiaX, 2023, 「アンワル首相が訪日, 日本との戦略的関係強化で合意」, (2025 年 1 月 22 日取得, https://www.asiax.biz/news/63737/#google_vignette).
- 外務省, 2006, 「「経済上の連携に関する日本国政府とマレーシア政府との間の協定」について」 (2025 年 1 月 22 日取得, https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/treaty/treaty164_2_gai.html).
- マレーシア日本国際工科院, 2022, マレーシア日本国際工科院概況, (2025 年 2 月 9 日取得, <https://mjiit.utm.my/wp-content/uploads/2018/06/2.-MJIIT-At-Glance-Japanese-20220228.pdf>).

マレーシアと日本のジェンダー格差

R.Yamada, K.Fukaya, M.Irie, K.Shimizu

はじめに

本レポートでは、マレーシアにおけるジェンダー格差に対する施策や価値観、姿勢などから、日本にも取り入れるべき要素を明らかにし、日本のジェンダー格差を改善するヒントを得ることを目的とする。ジェンダー格差の程度を測る指標としてジェンダーギャップ指数が注目されている。これは WEF (World Economic Forum) が毎年公表しているもので、政治、健康、教育、経済の四分野から算出されるものであり、0 から 1 の数値で表され、1 に近づくほど格差がないことを示す。2024 年度におけるジェンダーギャップ指数はマレーシア 0.688 で 114 位、日本 0.663 で 118 位と同程度であるが、その内情は当然異なっていると考えられる (WEF 2024)。今回はマレーシアのジェンダー問題に対する取り組みについて四項目に分けて調査し、それぞれの項目における日本の課題を踏まえた上で、マレーシアから学ぶべき点を考察していくことにする。

政治

ここでは、マレーシアにおける政治分野でのジェンダーギャップの原因と取り組みを説明・分析したうえで、日本の政治におけるジェンダーに関する課題について目を向ける。初めに、政治分野でのジェンダーギャップ指数は「国会議員の男女比」「閣僚の男女比」「最近 50 年における行政府の長の在任年数の男女比」の 3 つの指標により構成されている。2022 年におけるマレーシアの政治分野での指数は 0.102 (NNA ASIA 2023) であり、他の 3 項目と比較してもかなり低い数値である。この数値の低さの最大の理由として、女性政治家が少ないことが挙げられる。マレーシアの女性議員の割合は 14.1% と、世界平均の 25.5% (列国議会同盟 2021) に大きく差を付けられており、女性の政治的な決定における影響力が少ないという現状がある。

このような状況に対して、ジェンダー格差の是正のための動きもいくつか見られている。とりわけ、イギリスからの独立のためにマレー系ムスリムを統一することを目的として 1946 年に設立された UMNO (統一マレー国民機構) は、ムスリム女性の支持を得るために専門の政治部局を設置して、女性の政治・社会進出をテーマに長い間広範囲で活動を続けてきた。また、1988 年にはマレー系ムスリム女性の人権問題を扱う NGO である Sisters in Islam が成立し、国内のイスラム法体制が是認してきた一夫多妻制や「性別役割」を批判している。国家としてもイスラムの教義に基づいた女性の「母性保護」を重視した政策から女性の社会進出を後押しする方針へと転換し、2000 年には当時のマハティール首相により女性・家族省 (現在は女性・家族・地域開発省) が創設され、翌年には憲法改正により宗教、人種、出自による差別の禁止に「性別による差別の禁止」が加えられた (竹野 2024)。

このように、マレーシア政府は国民の運動を受けて少しずつ男女平等社会の実現へ向けて取り組みを行ってきた。しかしながら、これらの試みをもってしても政治における実質的な変化は顕在化していないと考えられる。その理由としては、UMNO 内での女性候補者の競争が起きていることや女性候補者が勝てる見込みのある選挙区に立てるケースが少ないことなどがあり、根本的には「男性は外で働き、女性は家事をするものだ」というジェンダーロール的なステレオタイプが残存していることがあると推測される（Malaysia Population Research Hub n.d.）。このような状況を打破するための先進的な手段として、アファーマティブ・アクションの一環である、選挙の際に女性議員の比率を割り当てるクォーター制が欧州を中心にいくつかの国で導入されている。しかしマレーシアでは、このアイデアは広く受け入れられているわけではない（Dahlia 2013）。その主な理由は、現行するマレーシアの人種政策であるブミプトラ政策にあるといえる。ブミプトラ政策とは国内で相対的貧困の立場にいるマレー系の経済的地位を引き上げることが目的としており、産業や大学入試などの場面においてマレー系国民を優遇するものである。現在は民族ごとの議員の比率は設定されていないが、もし女性議員のクォーター制が導入される場合、ここにブミプトラ政策を適用するか否かが議論になるだろう。ただしその際、現行のブミプトラ政策に対するマレー系以外の国民など一部の人々の不満が再燃し、政治的行動に発展する可能性がある。このような懸念もあり、マレーシア政府はクォーター制に対して慎重な姿勢を取っており、現時点において実行に移すのは難しいのではないかと考えられる。

次に、日本の政治におけるジェンダーギャップに注目する。2024 年の日本の政治分野でのジェンダーギャップ指数は 0.118 であり（WEF 2024）、マレーシアをわずかに上回っているものの 146 か国中 113 位と国際的にもかなり低い順位にあるといえる。2023 年 9 月の閣僚改造で女性官僚が過去最多の 5 人になったことを受けて前年（0.057）よりは改善したが、依然として日本の女性議員の割合は 9.7%とマレーシアを下回り、非常に低い水準である。また、両国とも女性が首相に就任したことがない点も共通している。

では、日本とマレーシアにおける女性の議員割合の低さの理由は同じであるのだろうか。平成 29 年に内閣府が女性地方議員に対して実施したアンケート調査によると、女性地方議員が少ない原因と考えられるものとして「議員活動と家庭生活（子育てや介護等）との両立が難しい（78.6%）」「政治は男性が行うものという固定的な考え方が強い（59.1%）」「研修や勉強会等の女性候補者を育成するための機会が少ない（48.3%）」という理由が挙げられ、さらに現在の議員活動における課題としては「女性として差別されたりハラスメントを受けたりすることがある（29.6%）」というものが挙げられた。これを踏まえると、日本とマレーシアでは、女性が政治に関わるイメージが浸透していないために進出が妨げられているという点において共通している。日本でも同様にクォーター制の導入は検討されているが、女性有権者が女性候補者に投票する認識が希薄であることや、かえって保守的な女性候補者が増加するといった課題が指摘されており、実現の見込みは少ないという（三浦 2013）。

これまでの議論をまとめると、マレーシア・日本両国において政治のジェンダーギャップ

指数はかなり低く、その主な理由としてどちらにおいても「女性が家事をする」というかつてのステレオタイプが拭いきれず、女性が政界に進出することについて社会全体としての意識が低いことが挙げられる。両国とも現状の改善が必要とされているが、有効な手段とされるクォーター制はさまざまな懸念により現時点での実現は難しいと考えられる。今後求められる対応として両国に共通していえることは、やはり根本的な社会の意識を変革していくことではないだろうか。男女平等に政治に参画できる環境を整えるため、第一歩としてクォーター制を適用できるまでのラインに国民の意識を高められるよう、政府・民間ともに啓発を続けていくことが必要だと考える。

健康

ジェンダーギャップ指数の「健康」分野は、男女の健康に関する格差を示す指標であり、日本は 0.973 で世界 53 位、マレーシアは 0.969 で世界 80 位となっている。この分野の数値は「出生児の男女割合」と「健康寿命」の二つの基準で評価される（WEF 2024）。一般的に、男児の出生割合は女児より高く、平均寿命は女性のほうが長いという特徴は世界共通である。これは生物学的な違いに加え、社会文化的な影響が要因であると考えられている。そのため、健康の分野で男女格差を評価する際には、単なる生命の長さではなく、自立した生活が可能な期間である健康寿命が特に重要視される（KYOWA 2022）。よって、健康における男女格差の是正のためのキーポイントを健康に暮らしていける期間の長さ即ち健康寿命と捉え、日本での課題を踏まえた上でマレーシアにおける実情や取り組みについて調査していく。

健康寿命の男女格差を生じさせている日本の課題は何なのだろうか。生活習慣的な要因では、男性の喫煙率や飲酒量が女性に比べて高いことが挙げられる（厚生労働省 2023）。さらに、心理的要因として、仕事上のストレスや退職後の社会的孤立が男性に与える影響は女性よりも大きく、自殺者の約 7 割が男性で占められている（MHLW 2022）。生物学的な要因だけでなく、こうした喫煙・飲酒・自殺などの要素が健康寿命の男女格差に影響していると考えられる。こうした観点から、マレーシアにおける実情やその背景、取り組みを調査する。

まず、喫煙に関して、国内喫煙率が 16.7%、男性の喫煙率が 27.1%である日本と比較して、マレーシアの国内喫煙率は 22.8%、男性の喫煙率は 45%と高く問題視されており、政府は改善のための対策を進めている。2019 年からは全飲食店での全面禁煙が法制化され、ジョホール州では 3 か月間で総額 60 万リンギット（約 1,950 万円）の罰金が科されるなど、規制が強化されている（Global biz net 2024）。

次に、飲酒に関しては、マレーシアの飲酒率は 12%と、日本の 69%と比べて非常に低い。これは、国民の約 65%がイスラム教徒であり、宗教的戒律によって飲酒が禁止されていることが主な要因と考えられる（社会実情データ図録 2003）。

また、自殺率について、マレーシアの自殺率が 5.8 人/10 万人と、日本の 19.7 人/10 万人よりはるかに低い背景には、宗教的・法的要因が関与している。イスラム教において自殺は罪とされており、さらにマレーシアでは自殺未遂が違法とされていることが、一定の抑止力となっている。また、日本ほど過労が深刻な問題になっておらず、家族とのつながりが強いと、経済的困窮が直接的に自殺に結びつきにくい（杏林医会 2018）。

これらのことから、日本がマレーシアから学べる点としては、コミュニティや家族のつながりを強化し、孤立を防ぐこと、ワークライフバランスの改善（長時間労働の是正）、精神的な健康サポートの拡充と、気軽に相談できる環境づくりなどが挙げられる。ただし、マレーシアの自殺率の低さには文化や宗教的背景が深く関わっており、日本にそのまま適用することは難しい側面もある。重要なのは、日本の社会の特徴を踏まえたうえで、社会的なつながりを強化する方法を模索することである。

教育

ジェンダーギャップ指数の教育分野においては日本が 72 位なのに対して、マレーシアは世界 1 位で値も 1.000 (0~1 の間で表現され 1 に近づくほど良い) である (WEF 2024)。では一体、日本は何をマレーシアから学ぶことができるのだろうか。まず日本の教育においてジェンダー格差といっても、何が具体的に格差なのだろうか。日本の教育分野でジェンダー格差が注目されるのは主に文理選択であり、特に理系の女性研究者が少ないことが問題視され、特に理学、工学の分野でそれぞれ 27.9%、15.4%と著しく低くなっていることがわかる (文部科学省 2019)。OECD の数学系の科目におけるジェンダー格差の調査では、対象 77 か国のうち日本は 67 位でかなり下位だった (OECD 2023)。しかしその一方で実はこれは非常に難しい問題である。ある研究では日本では小学生の段階で男子のほうが女子より算数や理科を好む傾向があり、女子は男子より国語を好む傾向があるという (内閣府男女共同参画局 2019)。しかしその一方で男子が理系、女子が文系を選ぶよう誘導されていると主張する記事もある (寺町 2021)。この分野は結論を出すには根拠が薄く、まだ研究の必要性がある。

ところがその一方でマレーシアでは現在、日本に比べてかなり多くの女性が大学で理系を専攻しており、2015 年時点でコンピュータサイエンスや数学、科学分野では生徒の 50.54%が女性であった (IBE 2018)。しかし、マレーシアでもひと昔前は、理系科目で男性のほうが女性よりも圧倒的に多かった。ではマレーシアでは文系理系間のジェンダー格差を是正するためにどのような施策が行われてきたのだろうか。マレーシアで理系を専攻する女子学生を増やすのに大きく寄与したものと思われるのは、理系専門の女子校の創設である。マレーシアでは国内には現在、六つの理系専門寄宿型女子校がある。このような女子校を創設することで回りに理系専攻の女性がいる環境を意図的に作り出し、できるだけ多くの理系に興味ある女性が、大学で理系を選択することを促していると考えられる。実際、

理系科目を女性教員に教わった場合とそうでない場合では女子生徒の理系傾向が前者では 33.8%なのに対して、後者では 22.5%であり大きな違いがみられ、身近に理系を専攻する女性がいることが大きな影響を与えうるということが言える（内閣府男女共同参画局 2019）。ただ、日本にはこういった女子校で理系専門の中学、高校は一つもない。日本もこういった学校を作ることによって女性が理系分野に進出しやすくなり、新たに生まれた女性理系教員を見てさらに女性が理系分野に進出する可能性が大いにある。

さらに男女間の大学進学率の差という点においてもマレーシアは日本より先行している。日本では、平成 28 年度において男子の大学進学率は 55.6%なのに対し、女子の大学進学率は 48.2%である、なおこの数字は短期大学を含まない（内閣府男女共同参画局 2017）。一方マレーシアでは 1970 年代には大学生の男女比率が 70:30 だったのが 2001 年には、45:55 にまでなった（Fernandez 2022）。この二国間の男女の大学進学率の差に関しては何が明確に原因かということはまだわからない。マレーシアが 1970 年から 2001 年までに行ったこととして教授言語の変更や、公立学校の増設、小中学校の授業料無料化の拡大などがあげられるが、日本とマレーシアでは人口動態も文化も異なり、単純な比較はできず、まして日本の小中学校も公立は授業料無料であるから、これらが二国の差を生み出したと言い切ることとはできない。ただ、あえて述べるなら、日本は都市部において男女ともに進学率が高いのに対して、特に農村部において女性の大学進学率は低い傾向がみられる（寺町 2021）。そのため、日本が男女間の大学進学率の格差に関して、マレーシアに追い付くには農村部への政府の取り組みが重要となるということとは言えよう。

まとめると、ジェンダーの側面からは、マレーシアの教育は非常に発達していて、理系選択者の比率、大学進学率をとっても男女格差はほとんどない。男女間の大学進学率の格差を縮める施策に関しては日本がマレーシアから学べることは少ないが、男女間の文理選択の差を縮める施策に関して、理系専門の女子校の創設という施策は、日本が真似るべきマレーシアの素晴らしい施策である。

経済

マレーシアの現状について、モナシュ大学の経済学者ニアズ・アサドゥッラーは女性の高賃金の仕事へのアクセスが限られていることを指摘した上で（the SUN 2024）、職業分離と女性に対する社会的固定観念を挙げ、例として教科書の多くにおいて家庭内の役割を女性が担っていることに触れた。Women's Aid Organization (WAO)のアデリーナ・ズルキフリ氏は、女性は依然として不完全雇用であり、自分のスキルセットをはるかに下回る賃金の仕事に就いていると述べた（FMT 2023）。

日本貿易振興機構（2023）によると、マレーシア政府のジェンダーギャップの改善に向けた取り組みとしては、2025 年までに女性の労働参加率を 59%まで高めるという目標を掲

げたり、公的部門における女性管理職割合を高めたり、上場企業に対して女性取締役の任命を義務付けたりといったものが挙げられる。

一方で、日本に目を向けると、男女間賃金格差が大きいなどの理由により、経済分野のジェンダーギャップ指数は123位である。この根本的な原因として、ニッセイ基礎研究所(2024)は2つの事象に言及している。1つ目は、統計的差別に由来する大卒女性の経歴断絶である。統計的差別とは、意図せずとも過去の統計データに基づいた合理的判断から結果的に生じる差別であり、「〇割の女性が出産を機に仕事を辞める」、「女性の〇割は専業主婦になることを望んでいる」といった統計データに基づき、退職を織り込んで採用を行うことなどが該当する。これにより大卒女性の離職からのフルタイム職への復帰が難しくなることによって経歴断絶が生じ、男性と比べて女性の雇用率や管理職比率が低くなっている。また、管理職に女性が増えない理由について、読売新聞(2024)は、社会保険の年収の壁、コース別の人事制度、マミートラックなど、性的役割分担を女性に選択させてしまう仕組みが制度的・組織的に温存されていることを挙げている。日本で経済分野においてジェンダーギャップをもたらしている2つ目の原因は、男性は仕事、女は育児や家事、男性は主要な業務、女性は補助的な業務といった日本社会の固定観念から生じる女性の非正規雇用割合の高さである。2023年における女性の非正規労働者の割合は53.2%で、男性の22.6%より2倍以上も高い。

パソナ(2025)によると、ジェンダー平等に向け政府は3つの取り組みを実施している。1つ目はアファーマティブ・アクションである。2020年代に指導的地位に占める女性の割合を30%にすることを目標に掲げている。2つ目は女性活躍推進法の制定である。2016年に施行され、女性活躍推進に向けた行動計画の策定・数値目標の公表・情報公開を義務付けた他、女性管理職比率などによって得られる「えるぼし認定」をインセンティブとしている。3つ目はイクメンプロジェクトである。男性社員の育児休業取得率を上げ育児への参加を促すことで女性の継続勤務を間接的に支援することを目的としている。

まとめると、両国とも社会的固定観念に起因するジェンダーギャップに対し、管理職割合の向上を図っている。しかし、マレーシアは職業分離が男女間格差の一因であるのに対し、日本は統計的差別に由来する経歴断絶に加え、性的役割分担を女性に負担させてしまう仕組みや制度の温存が最たる要因である。また、ジェンダー格差改善の施策も、マレーシアは女性の取締役取締役任命義務付けを行っている一方で、日本はイクメンプロジェクトといった取り組みを行っている。

マレーシアの取り組みを日本に応用することを考えると、女性取締役任命の義務付けのように明確に義務として課すことが日本の旧態依然とした制度や枠組みの打破につながり、有効なのではないかと考えられる。

おわりに

以上、政治・経済・教育・健康の四つの観点からマレーシアと日本とのジェンダー格差を

比較し分析してきた。政治面では、両国における指数の低さには共通して残存するジェンダーロールの考え方が女性の政治活動に対する支障になっていることが分かり、意識改革を通して選挙におけるクォーター制などのアファーマティブ・アクションが受け入れられる社会を形成する必要性が明らかになった。健康面では、日本人男性は女性より健康寿命が短いことを課題として取り上げ、マレーシアでは喫煙の規制が強化されており飲酒量も少なく、さらに自殺率の低さに関してはイスラム教の影響に加えて過労が少ない・家族の繋がりが強いという理由があり、日本は孤独感の解消のためにコミュニティの強化やメンタルケア体制の整備が有効であると論じた。教育面ではマレーシアはジェンダーギャップがほぼ存在せず、とりわけ理系分野で男女の差が少ない点と、大学進学率の男女比に近い点は日本と大きく異なり、日本も検討すべき対策として貧困層の援助強化と女子専門の創設が挙げられた。経済面では、日本では政治と同様の固定観念に加えて統計的差別に由来する経歴断裂が問題であり、マレーシアも高賃金の職業における女性のアクセスが限定的であるなど課題を抱えているものの、女性取締役任命義務付けなどのアファーマティブ・アクションは日本にも応用できると考えられる。

以上より、日本とマレーシアのジェンダーギャップの程度やその原因については共通しているものもいくつか存在し、その中でも特に性別役割分担の固定観念がジェンダー格差の根本的要因となっている事例が多くあった。この固定観念は国民の意識に根付いているため、政府のみならず民間、個人などが一体となって努力する必要がある。また、自殺率など原因が宗教に関連する場合は両国の相違が大きくなった。このように日本とマレーシアでは現状の背景となる価値観や文化が異なっているため、一国に有効な対策をそのままもう一国に適用できるとは限らない。したがって、他国の政策を参考にする際には自国の社会に適合するか考慮することに留意すべきである。ただし、今回の調査は日本のジェンダー格差を相対化し、研修にあたってマレーシアの文化的・宗教的背景の理解を深める一助となった点で非常に有益であると考えられる。

参考文献

World Economic Forum, 2024, “Women in Scientific Careers”:16-17

(2025年2月10日取得, https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2024.pdf)

文部科学省, 2019, 『学校基本調査』: 2

(2025年2月10日取得,

https://www.mext.go.jp/content/20191220-mxt_chousa01-000003400_1.pdf)

OECD, 2023,

‘Gender, Education and Skills’: 26 (2025年2月10日取得, [34680dd5-en \(1\).pdf](https://www.oecd.org/gender/data/34680dd5-en(1).pdf))

内閣府男女共同参画局, 2019, 『男女共同参画白書 令和元年度版』: I-特-9図

(2025年2月10日取得,

<https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/r01/zentai/html/zuhyo/zuhyo01->

[00-09.html](#))

IBE, 2018, 'Malaysia: Women in STEM'

(2025 年 2 月 10 日取得, <https://ibe-infocus.org/articles/malaysia-women-stem/>)

内閣府男女共同参画局, 2017, 『男女共同参画白書 平成 29 年度版』: I-5-1 図

(2025 年 2 月 10 日取得,

<https://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h29/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-05-01.html>)

寺町晋哉, 2021, 講談社,

『「女子は文系/男子は理系」のステレオタイプが存在するこの国の「教育格差」』 (2025 年 3 月 11 日取得, <https://gendai.media/articles/-/88240?imp=0>)

Fernandez, Jacqueline Liza, 2022, 'Women Education in Malaysia'

(2025 年 2 月 10 日取得, [buletin5.indd](#))

KYOWA KIRIN, 2022, 「ジェンダーギャップ指数とは？上位国に学ぶ取り組み」

(2025 年 2 月 12 日取得, <https://www.kyowakirin.co.jp/stories/20230306-01/index.html>)

Global biz net, 2024, 「マレーシアのビジネス文化 知っておくべき禁煙ルールと罰則」

(2025 年 2 月 12 日取得,

<https://globalbiz.net/southeastasia/malaysia/smokingpenalty2024-my/>)

社会実情データ図録, 2003, 「アジア各国の飲酒率」

(2025 年 2 月 12 日取得, <https://honkawa2.sakura.ne.jp/8042.html>)

社会実情データ図録, 2015, 「自殺率の国際比較」

(2025 年 3 月 11 日取得, <https://honkawa2.sakura.ne.jp/2770.html>)

杏林医会, 2018, 「マレーシアの医療と救急医療」 (2025 年 2 月 12 日取得,

https://www.jstage.jst.go.jp/article/kyorinmed/49/3/49_217/pdf)

国立研究開発法人国立がん研究センター, 2021, 「喫煙率」

(2025 年 3 月 11 日取得,

https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/smoking/index.html#:~:text=)

NNA ASIA, 2023, 「ジェンダーギャップ指数, 22 年は 0.694 」

(2025 年 2 月 12 日取得, <https://www.nna.jp/news/2602995>)

Red Yellow Blue, 2024, "Women's Day Malaysia Women's Right to Vote in Malaysia"

(2025 年 2 月 12 日取得, https://redyellowblue.org/data/my/wdmy/#google_vignette)

Dahlia Martin, 2013, " Women's vote in Malaysia" New mandala

(2025 年 2 月 12 日取得, <https://www.newmandala.org/womens-vote-in-malaysia/>)

Malaysia Population Research Hub, n.d.

"The Evolution of Gender Roles in Malaysia" (2025 年 3 月 12 日取得,

<https://mprh.lppkn.gov.my/the-evolution-of-gender-roles-in-malaysia/#:~:text=Gender%20roles%20in%20Malaysian%20families,women%20to%20be%20the%20caregiver>

竹野富之, 2024, 「マレー・ナショナリズムとフェミニズム ―英領マラヤ時代から現在に至るまでのマレー系女性ムスリムの人権をめぐる政治動向に焦点をあてて―」『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編 健康科学編』第7号(2025年2月12日取得,

https://researchmap.jp/read0193376/published_papers/47219979/attachment_file.pdf)

内閣府男女共同参画局, 2020, 『ジェンダー・ギャップ指数 (G G I) 2020 年』(2025年2月12日取得,

<https://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/ikenkoukan/80/pdf/4.pdf>)

三浦まり, 2013, 「クオーター制と日本の課題」『国際女性 No.27』(2025年2月12日取得,

https://www.jstage.jst.go.jp/article/kokusaijosei/27/1/27_96/_pdf)

Female Malaysia Today, 2023,

“Gender wage disparity still haunts Malaysian women” , Female Malaysia Today ホームページ, (2025年2月10日取得,

<https://www.freemalaysiatoday.com/category/highlight/2023/09/04/gender-wage-disparity-still-haunts-malaysian-women/>)

The SUN, 2024, “Gender pay gap thorn for women workforce” the SUN ホームページ (2025年2月10日取得,

[Gender pay gap thorn for women workforce](#))

日本貿易振興機構, 2023, 「マレーシアの女性労働参加率は ASEAN 第7位, 2025年までに59%へ」, JETRO ホームページ, (最終閲覧日 2025年2月10日取得,

[https://www.jetro.go.jp/biznews/2023/06/09e574a458417e37.html#:~:text=59%E3%BC%85%E3%81%B8-,%E3%83%9E%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%81%AE%E5%A5%B3%E6%80%A7%E5%8A%B4%E5%83%8D%E5%8F%82%E5%8A%A0%E7%8E%87%E3%81%AFASEAN%E7%AC%AC7,%E3%81%BE%E3%81%A7%E3%81%AB59%EF%BC%85%E3%81%B8&text=%E3%83%9E%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%81%AE%E3%83%8A%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%82%AF%E3%83%AA%E5%A5%B3%E6%80%A7,%E3%82%A4%E3%83%99%E3%83%B3%E3%83%88%E3%81%A7%E6%98%8E%E3%82%89%E3%81%8B%E3%81%AB%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82\)](https://www.jetro.go.jp/biznews/2023/06/09e574a458417e37.html#:~:text=59%E3%BC%85%E3%81%B8-,%E3%83%9E%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%81%AE%E5%A5%B3%E6%80%A7%E5%8A%B4%E5%83%8D%E5%8F%82%E5%8A%A0%E7%8E%87%E3%81%AFASEAN%E7%AC%AC7,%E3%81%BE%E3%81%A7%E3%81%AB59%EF%BC%85%E3%81%B8&text=%E3%83%9E%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E3%81%AE%E3%83%8A%E3%83%B3%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%82%AF%E3%83%AA%E5%A5%B3%E6%80%A7,%E3%82%A4%E3%83%99%E3%83%B3%E3%83%88%E3%81%A7%E6%98%8E%E3%82%89%E3%81%8B%E3%81%AB%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82)))

ニッセイ基礎研究所，2024，「日本における男女間の格差とその原因を考察する一統計的差別や性別役割分担意識の解消等意識改革が必要―」，ニッセイ基礎研究所ホームページ，（2025 年 2 月 10 日取得，

<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=77791?site=nli>）

読売新聞，2024，「ジェンダーギャップ指数ランキング，男女平等で 118 位の日本の低迷が続く理由とは？」，（2025 年 2 月 10 日取得，

<https://www.yomiuri.co.jp/otekomachi/20240613-OYT8T50080/>）

パソナ，2025，「ジェンダーギャップ指数とは？日本の現状と改善にむけた取り組みを紹介」，パソナホームページ，（2025 年 2 月 10 日取得，

<https://www.pasona.co.jp/clients/service/column/women/gendergap/#c05>）

UTM での授業の様子

K.Shimizu

はじめに

このセクションでは主に UTM での授業内容とそのおおまかな流れに関して述べていく。UTM での授業はジョホールバルにいる間の約 2 週間にわたり、基本的に授業の日は約二日に一日のペースである。授業の日は日によって異なるが、大体 8 時 30 分に泊まっている宿舎のロビーに集合し、そこから教室までバスで移動し、9 時くらいに始まり、17 時くらいに終わるというパターンが多かった。UTM では SDGs に関する授業が行われ、授業は教授による講義とグループプレゼンテーションの 2 タイプがあった。

講義

以下は教授たちによる講義の内容であるが、どれも内容的には基礎的なものが多く、理解するのに特別英語力が求められたりすることはない。一つの講義は一日一回約 2 時間で、2 週間で六つの講義が行われる。授業内では生徒は聞き方に徹するというよりも、グループ内でディスカッションをして、積極的に参加することが求められる。また例えばプレゼンテーションスキルについての授業など後述のグループプレゼンテーションに役立つ講義もある。教授たちも講義の中で、リサーチやプレゼンをする際に何が大切かということを教えてくださり、講義の内容をいかに踏まえてグループプレゼンテーションを行うかでそのグループのプレゼンの評価も大きく変わるため、グループプレゼンをするにあたっても教授たちによる講義は非常に重要な位置づけとなっている。

Lecture1) 17 の SDGs の目標について

Lecture2) ローカボンの都市をいかに作っていくかについて

Lecture3) いかに持続的に生産と消費を行うかについて

Lecture4) 参加大学それぞれのキャンパスにおけるグリーン活動

Lecture5) プレゼンテーションの技術について

Lecture6) 環境と経済の関係性について



授業のスライド



講師とバディさんと各国からの参加者との合同写真

グループプレゼンテーション

また、もう一つの軸のグループプレゼンテーションについてであるが、これは最初に1チーム約6人のチームが8個作られ、チームごとにSDGsに関するいろいろなテーマが振り分けられる。その後、振り分けられたお題をもとにチーム内で協力して、プレゼンテーションの内容やスライドを作り、UTMでの最後の授業の日に、全チームがSDGsに関する約15分のプレゼンテーションを行うといったものである。これらのプレゼンテーションはUTMの教授方に評価され、優秀なチームには表彰状とお菓子やお土産が配られる。

実はこのUTMのプログラムにはいろいろな国の学生が参加しており、それぞれのチームには必ず様々な国籍の人がいるように設定される。しかもお題に関するプレゼンテーションを行うことと、チームごとに異なる2, 3の必要条件を満たすこと以外は制限がないため、内容を決めから発表の練習までチーム内で国境を越えてしっかりと協力やコミュニケーションを図って、段取りを決めていく必要がある、非常にタフなものである。ただ、タフながらチームで一つのことを作っていくうちに、チーム内の絆も深まり、かつ国境を越えて一つのものを作るというのはなかなかない経験のため、やりがいも生まれる。自分自身やりきったときには達成感があり、さらなる自分に対する自信になった。特に将来海外で働きたい人などにとっては、海外の人と協力して何かを作り上げるというのは、とても良い経験になると思う。

休憩時間と授業の構成について

以上のように講義とグループプレゼンテーションの二つがある中で、授業の日は一日中グループプレゼンテーションの準備だけをする日か、午前中に講義を行い、午後にグループプレゼンテーションの準備をする日の二タイプに分かれる。もしかしたら一部の読者は朝9時

から 17 時までそんなことするなんて，グループプレゼンテーションはどれだけタフなんだと思われるかもしれない。だが実際には 1 時間か 2 時間ごとに昼食休憩か普通の休憩があり，しかも昼食休憩は 2 時間で，みんなで卓球しながらリフレッシュできるので心配ご無用である。



チームの様子

グループプレゼンテーション

まとめ

これが UTM での授業の主な流れになる。読者の皆さんはもしかしたら授業なんて退屈でつまらない，もっとマレーシアのいろいろな場所に行きたいと思われるかもしれない。しかし，個人的にはマレーシア研修のなかで授業は一，二を争うくらい面白かった。国境を越えて，友情を築き一つのものを作り上げることや，自分の意見を主張し，相手の言い分を聞いて，うまく折り合いをつけていくことは経験してみないとわからないものであり，筆者自身とてもいい経験になった。これを読む読者の皆さんが将来マレーシア研修に参加し，同じ体験をしてくれると筆者はとてもうれしい。

クアラルンプール視察

R.Yamada

最初の 1 週間は、UTM があるジョホールではなく、マレーシアの首都であるクアラルンプールにて主に施設の訪問や観光をして過ごした。グループによって訪れた場所に大きく違いがあるため私が属していたグループの一例となってしまうが、ここではクアラルンプールでの各日の経験について記す。

1 日目

City Walking

ホテル付近の街を散策する 1 日であった。まずグループごとにバディに連れられて Central Market に行った。グループの中国人の子や現地のバディと最初に話す機会であり、仲良くなることができた。Central Market は小さめのショッピングモールのようなところであり、現地特有の商品が見られると思ったが、日本や中国の商品で溢れており、マレーシア独特の文化を感じることはできなかった。その後ランチを食べるために別のショッピングモールに移動した。ショッピングモール内の光景は日本とかなり似通っており、無印良品など日本のお店も多く進出していて、グローバル化を実感することができた。Central Market にも飲食店があったのでなぜ移動したのかは謎であったが、後からバディが Central Market の飲食店は衛生状態が悪いことを考慮し研修生に気を遣って移動してくれたとわかり、細やかな気遣いに自分が気が付いていなかったただけだと後から知ることになった。その日はフードコートで各々好きなものを食べ、室内をぶらぶらした後ホテルに戻って昼寝した。この昼寝はムスリムであるバディが礼拝をするために設けられていた。その後再び外に出て、ローカルな飲食店に入り夜ご飯を食べた。頼んでもいないのに巨大で毒々しいピンク色のジュースが出され驚いた。溶けたアイスクリームの味がしたが、ドラゴンフルーツジュースであるとのことだった。



2 日目

MJIIT 訪問

MJIIT (Malaysia-Japan International Institute of Technology) を訪問した。MJIT はマレーシアにおいて日本型の工学系教育を行う学術機関であり、実際に訪れた藻類バイオマス研究室では、年間を通して暑いマレーシアの気候的特徴を活かした培養の研修を日本

人の方がされていたり、Panasonic との共同研究がされている部屋があったりした。文系には難しい話が多かったが、普段立ち入ることのない分野なのでとても新鮮な体験であった。一緒に来ていた中国からの留学生たちは理系だからか興味深そうにしていた。マレーシアと日本で共同して研究がされている現場を知ることができ、マレーシアと日本の技術的なつながりを感じた。



Twin Tower

夜は前日とは違うショッピングモールで夜ごはんを食べた後、マレーシアの観光名所である Twin Tower を訪れた。Twin Tower は通信塔としては東南アジアで最も高く、バディによると世界で最も高いツインタワーであるらしい。中には入れなかったが、外から見るだけでも迫力があり圧巻であった。クアラルンプールがアジアの中でも有数の発展した都市であることが肌で感じられた。



3 日目

ヤクルト工場訪問

午前にはヤクルトの工場を訪れ、ヤクルトの製造過程を見学した。日本にはない無糖の青のヤクルトがあり珍しく感じた。工場の中には従業員の方々も見えたが、就業時間外だったのか休憩時間だったのかほぼ全員機械に腰掛けてスマートフォンをいじっていたのが印象的だった。記念にパンフレットに押したヤクルト工場のスタンプがとても可愛らしかった。このヤクルト工場訪問は、世界中にシェアを誇る身近な日本企業について国外でグローバル化を肌で感じ、学ぶことができた経験となった。その後、マレーシアのソウルフードのような食べ物である Ayam Naci (チキンライス) を食べた。



国立ミュージアムと国立モスク

午後は国立ミュージアムに行った。RM5(日本円で 200 円ほど)で入場することができた。マレーシアの歴史について原始時代から現代にかけて詳しく解説されており、歴史好きとしてはとても興味深かった。同じグループの留学生たちが疲れてベンチで休んでいた一方で、日本人勢は興味津々で、バディに帰るよと言われるまでじっくり回った。バディの一人

がずっと私たちに付き添ってくれて、展示物について補足説明をしてくれたり、イスラム教について教えてくれたりしてとてもありがたかった。日本がマレーシアを占領していた時代について展示されていたスペースもあり、どの国が占領していた時代の説明も中立な書かれ方がされている印象を受けた。

その後、国立のモスクに行った。肌や髪を隠すために貸し出しの服を着て、裸足になって中に入った。そこで、バディや他のムスリムが実際に礼拝をしている姿を見ることができた。その際なぜ女性は髪を隠す必要があるのかとバディに聞いた時に、「男性の目から神聖な女性を守るため」と言われた時は予想に反していたため驚いた。



4 日目

バトゥ洞窟

4 日目はバトゥ洞窟を訪れた。とにかくゴミと猿と鳩が多かった。そびえ立つ像は写真で見えていたよりも大きく迫力があり、洞窟に続く長い階段はカラフルだったことが印象的であった。バトゥ洞窟はマレーシア随一のヒンドゥー教の聖地のような場所であり、洞窟内にはヒンドゥー教に基づく展示や壁画があった。洞窟内は湿っており、外の暑さと相まって蒸し暑かったが神聖な雰囲気を感じられた。3 週間全体を通して常にバディと他の研修生とのグループ行動だったので、この頃になると、私たちはバディにとにかくついていく習性が身についていた。必死についていこうとするあまり、男子バディの行き先がトイレなのに気づかず「トイレに行くんだけど」と言われるまで気づかなかった研修生もいるほどだった。研修生同士で「主体性を取り戻さない」と話した思い出がある。



マラッカ視察

K.Shimizu

はじめに

この章ではマラッカ視察について述べる。マラッカ視察は 2 泊 3 日で非常に短く、内容も主に観光と散策で、講義や授業などは基本的に何もなかったもので、ここでは私がマラッカに行って感じたことをありのままに書こうと思う。

1 日目

マラッカまではクアラルンプールからバスで約 3 時間の道のりである。午後 1 時くらいにマラッカには到着し、全員でお昼ご飯を食べた。自分はハンバーガーを頼んだ。マレーシアでハンバーガー？と思う方もいるかもしれないが、マレーシアのハンバーガーは本当にジューシーでおいしい。ハンバーガー一つとっても、緑色のハンバーガーや赤色のハンバーガーなどいろいろな種類があるのでぜひ一度試して欲しい。

そのあとはグループごとに散策、観光を行った。私たちのグループは、特段行き先を決めず、ぶらぶらしていただけだったが、それでも海港都市マラッカとしての面影を十分に感じることができた。例えば、私たちが立ち寄ったセントポール教会は東南アジアで最も古いと呼ばれている教会で、マラッカがポルトガルに占領されたところに作られたものだ。仏教、イスラム教、ヒンドゥー教の国にキリスト教の昔の教会があることや、古そうで歴史を感じる教会の建物からは香辛料貿易で栄え、多くの宣教師が布教しに来た当時のマラッカを思い起こさせる。また、オランダ広場をはじめとして、ジョンカーストリートや赤色の屋根の建物が立ち並ぶ川沿いなど、中心部は本当に町並みが美しく、落ち着いた港町としての雰囲気も感じられた。これはマラッカが世界遺産に登録されていて、マラッカの特に中心部では、町全体としての基調や統一感を乱すような建物は立てることができないためだ。自分にはこれらのマラッカの歴史的背景と落ち着いた街並みがクアラルンプールやジョホールバルなど他のマレーシアの都市と異なるマラッカ独特の雰囲気を醸し出しているように思えた。

散策の後には一度ホテルに戻り、そのあと皆で外出して夕食として中華を食べた。その中華料理屋さんの客の中に、たまたまその当日が誕生日の子供がいた。自分たちや、その子のことを全然知らない地元の人も加わって全員でその子の誕生日をお祝いするところに、マラッカの人の社交性の高さや陽気さを感じた。中華料理自体は美味しかったが、基本的にマレーシアの料理は辛かったので、辛いのが苦手な人は注意が必要だ。その後ホテルに帰り一日目が終わった。



夜ご飯を食べた中華料理屋



セントポール教会

2日目

二日目は朝 9 時から活動開始だった。この日も散策というような感じで自分たちのグループは公園や Taming Sari Tower に行った。その後は昼食として海鮮うどんを食べたのち自由行動であった。この自由行動の時間に、自分はカフェに行き、バティックの服を買い、マッサージを受けに行った。自分は人生で一度もお金を払ってマッサージを受けたことはなかったのだが、非常に気持ちよかった。ただおそらく日本のものよりもかなり力をかけられるので注意が必要だ。痛い人は本当に痛いらしく、私の隣でマッサージを受けていた参加者は、寝ている台座の上でもがき苦しんでいた。またここが多民族、多言語国家マレーシアならではのと思うのだが、マッサージ師はマレー語だけを使っているため、英語が伝わらないのだ。そのため意思疎通が図れず、隣の人はただもがき苦しむだけになってしまった。幸いにして怪我などはなかったのだが、英語が通じないというのは自分にとってかなりショックで、異国に来たなとより感じ、いい経験になった。

その後は全員で海に行き、夕日を見に行ったら、夜はジョンカーストリーの市場を練り歩いた。ジョンカーストリーは多くの人で賑わっていて、通りの端まで露店がずらっと並んでいた。露店には、食べ物から筆記用具、宝石など様々な物が売られていて、食べ物といってもドリアン、焼き鳥、フライドポテト、ジュース、麺類など様々なものが売られていた。自分はアイス揚げたものとマンゴージュースとトルネードポテトと辛い野菜炒めのようなものを頼んだ。どれも少し値段が高く感じられたがおいしく、特にマンゴージュースは本当に濃厚で今でも印象に残っている。逆にそのあとにマレーシアで飲んだほかのマンゴージュースが物足りなく感じられたくらいだ。

ただ、環境への配慮という点で気になることはかなりあった。例えば、ゴミの分別はというと、本当に適当で、露店のわきに設置されているゴミ箱の中身は生ごみ、プラスチックごみ不燃ごみ、ビン、可燃ごみなどすべてがごちゃ混ぜの状態であり、近くに行くと本当に臭い。また川の色も夜だとわからないが、昼はほんとうに汚く、日本の川がいかにかきれいで、

環境への配慮がなされているかをマレーシアにきて思い知った。環境に対する二国の考え方の違いを肌で感じた瞬間だった。

そんなこんなで結局 22 時ぐらいにホテルに戻り，二日目が終わりを，翌日は朝からジョホールバルに向けたバスに乗ったため，マラッカ視察はこれで終わりとなった。



Taming Sari Tower から見た景色



ジョンカーストリートの入口

まとめ

マラッカ視察を通じて，マラッカの文化的側面や歴史的側面，さらには日本とは異なる環境に対する考え方の違いに触れることができ、短いマラッカ視察ではあったが非常に有意義な時間になった。食事も全体的に美味しく，特にあのマンゴージュースは多分一生忘れない。加えて，この頃になると，バディさんや中国から来た学生の方とも仲良くなり，どんな時でも楽しく時間を過ごすことができた。マラッカを離れる際に，「またジョンカーストリートを歩きたい，名残惜しいな」と思えるマラッカ視察だった。

ジョホール視察

M.Irie

研修の2週目からは、マレーシアの南端にあるジョホール(Johor)州で過ごした。一橋大学、東京学芸大学、立命館大学、中国の大連大学、インドネシアの Diponegoro 大学の参加者、そして UTM のバディたちが8つのグループに分かれ、グループプロジェクト・自由時間ともに一緒に行動した。講義も開始して本格的に SDGs について考えを深めた期間であったが、グループごとの外食や全体での視察、ホームステイなど多岐にわたる活動を楽しんだ。ここでは、ジョホールでの2週間において特に印象的であった出来事を紹介する。

2日目—UTM 内のモスク訪問

我々がジョホールに到着した翌日は市内を観光し、その次の日の午後に UTM 内の Marine Lab とモスクを訪れた。まず、我々の宿舎から目的地までの移動にバスが必要なほどに、UTM の敷地が広大であったことにとても驚いた。キャンパスの総面積は一橋大学の約40倍である。

UTM 内のモスクでは、ムスリムの方々からイスラム教の礼拝や礼拝を呼びかけるアザーンについて実演してもらいながら教わることができ、日本では難しいであろう貴重な経験を得た。彼らは女子学生にヒジャブを貸し出し、正しい身に付け方を教えてくれた。さらに最後には、参加者全員の学業における成功を祈ってくれた。非ムスリムの我々をあたたかく歓迎してくれたことを、とても嬉しく思った。



UTM のモスク

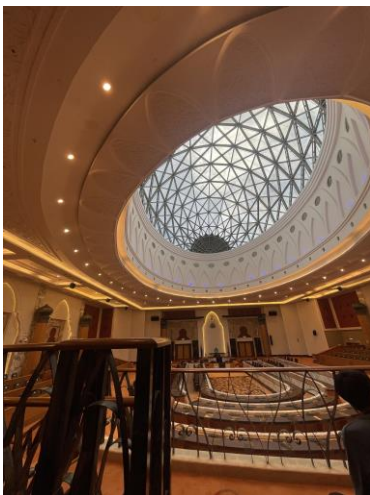


ヒジャブを身に付けた女子学生

5 日目—Iskandar の議会・Forest City 視察

この日の午前中はジョホール州内の経済特区である Iskandar の議事堂を訪れた。約 200 年前に建設されたという議会はイスラム様式のモチーフが散りばめられた荘厳な建物であった。内部は天井が特産品であるパイナップルの形になっていたり、スピーカーの席はイスラム教の聖地メッカに向き、王座の上にコーランが掲げられていたりするなど、政治の場にマレーシアの文化的・宗教的要素が積極的に取り入れられていたことが印象に残った。その一方で、王座の色がイギリス王室のロイヤルブルーであることから英国の植民地支配の形跡が伺えた。

午後には、ジョホール王室や同州政府の支援を受ける地場企業と共同で開発が進められている住居地域である Forest City を視察した。その中にある商業施設の内部は壁から天井まで植物で覆われており、自然と共存する近未来的な都市というコンセプトが感じられた。すぐそばにはビーチもあったが、砂浜と植物の区画が整然と分けられていたり、アザラシ・カニの写実的なオブジェが設置されていたりするなど、自然の中に人工物が混ざっている光景が日本ではあまり見慣れないものであったため記憶に残った。



Kota Iskandar (議事堂)



Forest City のビーチ

6 日目—Kukup でのリゾートステイ・Culture night

この日、我々は UTM を離れて Kukup という漁村へ移動し、海上のコテージに一泊した。スクールによって Kukup ツアーは流れてしまったが、コテージにはカラオケ、麻雀、卓球台など沢山の娯楽が用意されており、全員が国籍に関係なく思い思いに遊んでいた。夕食はホストの方々がテーブルいっぱい何種類もの料理を提供してくれて、大人数で食卓を囲み和気あいあいとした雰囲気の中で食事をいただいた。

夜には研修の一大イベントである Culture night が開催された。参加者・バディたちは自国の伝統衣装を身にまとい、自分たちの文化についてプレゼンテーションを行った。中には

日本の茶道や中国の習字などのパフォーマンスをする参加者もいて、終始大盛況であった。この空間では、全員が異なる文化に対してオープンな姿勢を持って互いの文化を尊重しており、多文化共生が自然と実現されていた。思い返してみても素晴らしい経験であった。



コテージでの夕食



Culture nightの様子

10 日目—Cultural Village

この日の午前中は Tropical farm という農場を訪問し、マレーシアの植物について説明を受けたり養蜂場を見学して取れたての蜂蜜を食べさせてもらったりした。

午後には Malay Cultural Village という施設で、マレーシアの伝統文化を教わったり体験したりすることができた。特に印象的であった文化体験は、パティックという伝統的な布地の染色である。各自が花や鳥が描かれた白い布に色を付け、個性豊かな作品が生まれていた。その他にも、マレーシア版パンケーキのようなロティチャナイという食べ物作りに参加者数名が挑戦してみたり、マレーシアの伝統的な舞踊や影絵を鑑賞したりした。Cultural Village での経験を通して、近代化以前のマレーシアにおいて人々がどのように生活していたかを垣間見ることができ、非常に有意義な時間であった。



パティックの見本



伝統的な影絵

参考文献

NNA ASIA, 2024,

「【ビジネスノート】ジョホール海峡に浮かぶ夢 碧桂園の『森林都市』」

(2024 年 4 月 9 日取得, <https://www.nna.jp/news/2622708>)

コラム① マレーシアの天候と服装について

T.Matsuzaki

マレーシアは熱帯雨林気候に属し、年間の平均気温は 26～27℃である。1 日の最低気温は約 25℃前後、最高気温は 35℃弱であり、年間を通してその高温多湿な気候が特徴だ。湿度は 90%を超える日も多く、蒸し暑い気候が年中続く。日本の梅雨以上に湿気が高く、気温の高い時期がほとんどであり、体がべたつくように感じることもあった。ただし、日本の夏のように 35℃を超える猛暑日が発生することはない、特に朝や夕方は気温が 25℃前後となり、気温に関しては過ごしやすいと感じることが多かった。マレーシアの天候に関して最も大きな特徴は、スコールが頻繁に発生することである。湿気が多く、大気が不安定な日にはゲリラ豪雨であるスコールが短時間に非常に激しく降る。私たちがマレーシアを訪れていた期間中にも、何度か激しいスコールに遭遇した。その度に日常的に発生するスコールにすっかり慣れていて、全く動じる様子のない現地の人々の姿に驚かされた。



スコールが発生する前の厚い雲に覆われた空の様子

このような気候のマレーシアで暮らす人々の服装について紹介する。1 年を通して高温多湿な気候であるため、日本の夏の服装、例えば T シャツに短パン、サンダルといったラフな格好で過ごすことができる。マレーシアの人々は常に高温多湿な気候で過ごしているため、暑さに強いと考えられがちであるが、実際には暑がりの人が多いと感じた。ショッピングセンターやレストランなどでは冷房が強めに設定されていることが多いため、上着など羽織るものを常に携帯しておくことと安心である。現地の人々は冷房が強く効いた室内でも基本的に半袖で過ごしているため、冷房を寒いと感じる日本人にとっては温度調整に苦労することがあった。

また、マレーシアを訪れる際には、モスクや宗教関連の施設、州の行政施設を訪れる際には服装に制約があることに注意する必要がある。モスクに入る際、イスラム教の教えに従い、女性は肌の露出や体のラインが分かる服装では入場できない。そのため、長袖、長ズボン、スニーカーといった服装が推奨される。また、モスクに入る前にはローブをかぶり、髪の毛

を隠すことが求められる。マレーシアは多民族国家であり、その約 60%がムスリムであるため、街中でもムスリムの服装をした女性を見かけることが多い。男性には細かな服装の制約は少ないが、モスクは非常に神聖な場所であるため、ラフすぎる格好は避け、清潔でかしまった服装で訪れることが大切である。また、イスカンダル（ジョホール州と連邦政府の合同庁舎）をツアーで訪れる際には、行政機関の施設であるため、服装に配慮することが求められる。



クアラルンプールのモスクを訪れた際の服装



マレーシアの伝統的な民族衣装

最後に、マレーシアの伝統的な衣装について触れたい。Kukup で行われたカルチャーナイトでバディが着用していた服装がマレーシアの伝統的な衣装であった。ここでは、マレーシアの中でもイスラム系の男性、女性の伝統的な衣装の一つである「バジュ・メラユ (Baju Melayu)」と「バジュ・クルン (Baju Kurung)」について紹介する。「バジュ・メラユ」は男性用の衣装であり、ズボンの上に伝統的なシャツを着ていて、このシャツがバジュ・メラユと呼ばれる。シャツの下には、腰巻きのサンピンを身に着けている。頭にはコピアという帽子を被ることもあるようだ。次に、「バジュ・クルン」についてである。これは上下に分かれた体が布で覆われるようなセットアップとなっている。上述した通り、ムスリムの女性は肌を露出することはないため、街中でこのバジュ・クルンを着用した女性を多数見かけることがあった。それほどムスリムの女性の日常に根付いた服装であることが窺えるだろう。もちろん、マレーシアは多民族国家であり、中華系やインド系のルーツを持つ人々は、それぞれの伝統衣装を着て行事に参加することが一般的であるようだ。街並みだけでなく、人々の服装にも多様な文化が反映されており、多民族国家としての在り方を実感することができた。

参考文献

マレーシア政府観光局, 2025, 「Malaysia truly Asia」

(2025 年 4 月 5 日取得,

https://www.tourismmalaysia.or.jp/basicinfo/02_travelinfo.html#pagelink_areakiko)

ASEANPEDIA, 2025, 「人々と民族衣装」,

(2025 年 4 月 5 日取得, <https://aseanpedia.asean.or.jp/human/>)

コラム② 猫の国マレーシア

R.Yamada

猫が多く、犬が少ない

マレーシアにはとにかく猫が多い。街を歩いているとそこら中に野良猫がおり、またバディの話を聞いても猫好きや猫を飼っているマレーシア人が多い。私のバディは実家で猫を8匹飼っているとのことだった。実際に、マレーシアでは猫はペットとして非常に人気があり、2022年現在、猫のペット人口はペット人口全体の55.3%を占めている(Data Resources, Inc 2022)。そして、野良猫に関しては、日本の野良猫と異なる最大の点として、とても人懐っこいことが挙げられる。載せている写真の猫は全て初対面の野良猫であるが、目があっただけでついてきたり、顔を近づけてきたり、撫でるとお腹を見せたり非常にフレンドリーであった。日本でいう「ちゅーる」のような猫用のおやつをスーパーで買ってきて野良猫の心を掴む参加者もいた。



猫に対して、マレーシアで犬を見る機会は本当に少なかった。記憶が正しければ3週間で野良犬を一匹、飼い犬を一匹見たきりである。バディと話していても犬が好きという話は聞かなかった。私が実家で飼っている犬の写真を見せた時よりも、参加者が飼っている猫の写真を見せた時の方が断然盛り上がっていた。



宗教的背景

マレーシアに猫が多く、犬が少ないことに疑問を持ち、バディに質問をしてみた。すると、「イスラム教では猫が大切にされている」「ムスリムにとって猫は本当に大切なペットなんだよ」という答えが返ってきた。反対に、犬に関しては、「豚が良くないものとされているように、犬も汚れていると考えられているんだよ」とのことだった。この動物観は古くからイスラム教で受け継がれてきたものであるが、多文化国家であるマレーシアでは中華系やその他の民族が犬を飼っていることもあり、現代のマレー系ムスリムに、犬に対するそこまで強い嫌悪感はないようであった。

おわりに

「この国、猫が多いな」とふと抱いた小さな疑問を深掘り、その背景に目を向けてみると、宗教という想定していたよりも奥深い要因が絡んでいることがわかり、興味深かった。今後、小さな疑問から目を逸らさず「なぜ？」を考えて過ごしていきたいと思う。

参考文献

Data Resources, Inc, 2022, “マレーシアのペットフード市場”
(2025 年 4 月 9 日取得, <https://www.dri.co.jp/auto/report/mordor/240217-malaysia-pet-food-market-share-analysis.html>) .

コラム③ 自動車大国マレーシア

K.Shimizu

このコラムではマレーシアの自動車文化が非常に興味深かったので紹介したい。マレーシアは自動車大国だ。とても危険な自動車大国だ。実際マレーシアは人口に対する交通事故による死者数の割合が世界で3番目に多い(海外情報ナビ 2023)。自分はそれを3週間の研修の間に身をもって感じた。様々なエピソードがあるが、例えば都市の中心部をのぞいたら、基本的にマレーシアの一般道の法定速度は時速90キロ、高速道路では時速140キロにもなる。つまり、実際に運転したことのあるみなさんは想像も難くないだろうが、実際には一般道では軽く時速100キロ、高速では時速150キロで走るということなのだ。これだけ高速運転をするとハンドルが振るえて、車体のコントロールも難しくなる。

他にも信号がない横断歩道がある。これだけ聞くと「そんな横断歩道、日本にもあるじゃん」と思う方がいるかもしれないが、第一にマレーシアの車は止まってくれない。日本であれば、横断歩道に人がいると車が止まってくれることがあるが、マレーシアではまずそれがない。次々と車が止まらず横断歩道を通過していく。その結果、歩行者が本当に少しずつ横断歩道を渡りながら、車を強制的に低速にさせて渡るしかない。

さらにタクシーでも危険な思いをした。研修中、私たちはもちろん車を持っていないので移動にGrabというタクシーを使うのだが、このセキュリティ面で安全と言われる、しっかりしたタクシーでさえ運転は非常に粗い。例えば時速80キロぐらいで走っていても車間距離は5mくらいしかとらない。もっと酷くなってくると、目の前に車がいるのにゲームをしながら運転するドライバーもいる。そのほかにも日本では信じられないエピソードがたくさんあるが、ここでは割愛する。一体なぜマレーシアではこんなにも危険運転が日常的なのだろうか。

研修中、その理由が気になったので、「マレーシアの人の運転って日本と比べると結構アグレッシブだね」とバディさんに伝えてみると、「だって、早く着きたいじゃん」と返された。その時、これは文化の違いなのだなということを感じた。というのは、個人的な印象ではあるが、日本でも例えば関西の人、特に大阪の人の運転は関東の人の運転に比べて明らかに荒いと感じる。実際、関西に住んでいる自分の親戚もよくそのことを自分に伝えてくる。理由はなぜかと言われれば、自分には文化の違いくらいしか思いつかない。それと同じようなことがマレーシアでも起こっていると自分はその時感じたのだった。

では実際にはどうなのだろうか。調べてみると、実際にマレーシアでは交通安全の意識が低いとの記事が見受けられた(海外情報ナビ 2023)。たしかに世界で3番目に人口に対する交通事故による死者数の割合が大きいという事実から考えても、交通安全の意識の問題があると言わざるを得ないだろう。ただ、文化や意識の問題の他に、三つほど原因を指摘する資料が見つかった。一つ目は交通違反の罰金の割引である。実はマレーシアでは、国の祭

日に近づくと、交通違反の罰金の割引キャンペーンが行われるのだ。このキャンペーンにどんなメリットがあるのかは、説明を見つけないので全くわからないが、いずれにしてもこのキャンペーンが交通違反を加速させている可能性は大いにあると思う（地球はコーヒーで回っている O. M. C 2021）。

二つ目の原因として考えられるのは、無免許運転が多発していることだ。実際クアラルンプール市内では 2014 年時点で約 100 万人が無免許運転をしているとも言われている（在マレーシア日本国大使館 2014）。バディさんも無免許運転をする人が多くて危ないと言っていた。では、なぜ無免許運転が多発するのだろうか。理由ははっきりとわからなかったのですがここからは推察になるが、車が人々の生活の足になっていて、免許を持っていない人も使わざるを得ないというところがあるのではないだろうか。例えばジョホールバルには電車が全く存在しないので、どこかに行くにはバスを使う以外、車が絶対に必要である。このことが交通ルールをあまりわかっていない免許を持っていない人の運転を誘発し、さらにマレーシアの交通事情を悪化させているのではないだろうか。

最後に道路状況の悪さを指摘している文献があった（海外情報ナビ 2023）。この点は研修参加者全員が感じたことではないだろうか。特に Kukup に行ったときの道は参加者の一人が頭をバスの天井にぶつけるくらいデコボコの道だった。この点は間違いなくマレーシアの交通事故の多さに影響していると私は思う。

解決策として以下の 4 つが浮かんだ。第一に、交通違反金の割引制度を廃止することである。罰則の本来の目的は抑止効果にあり、割引があることでその効果が薄れてしまうおそれがある。違反を軽く捉える風潮につながりかねないため、この制度は見直されるべきだと考える。第二に、道路環境の整備である。特に歩行者用の信号機や横断歩道の増設は、歩行者の安全確保において不可欠である。第三に、交通違反をしないことによるインセンティブの導入である。たとえば、日本の「ゴールド免許」のような仕組みがあれば、模範的な運転を促進できる可能性がある。第四に、運転に対する意識の改革である。これは短期的に変えられるものではなく、教育や啓発活動を通じて、長期的な変化を促す必要があると感じた。

ただし、これらの提言はあくまで日本人である私の視点に基づくものであり、日本の交通制度や価値観をそのままマレーシアに適用すべきだという意図ではない。渡航前授業で学んだ「他者理解」「自己理解」「自文化中心主義」という観点から考えると、私の視点にはまだマレーシアの交通文化への十分な理解が欠けている可能性があることも否めない。

そのため、マレーシアの交通事情に対して提言するにあたっては、「なぜ現在の制度が存在するのか」「現地の人々はどのように捉えているのか」といった背景をより丁寧に知り、尊重する姿勢が欠かせないと感じた。この内省を通じて、他文化を一方的な価値観で判断するのではなく、相互理解の中でよりよい改善策を見出していくことの重要性を再認識した。

参考文献

海外情報ナビ, 2023, 「世界で 3 番目に交通事故死亡者数が多いマレーシア」,

(2025 年 4 月 7 日取得,

<https://global-biz.net/southeast-asia/malaysia/traffic-accident-worst3-my/>).

地球はコーヒーで回っている O.M.C, 2021, 「【マレーシア】いまだに続く交通違反罰金『ディスカウント』とは」, (2025 年 4 月 7 日取得,

https://coffee.officegfix.com/malaysia_discount_fine_traffic-offence/).

在マレーシア日本国大使館, 2014, マレーシア安全生活情報,

(2025 年 4 月 7 日取得,

<https://www.my.emb-japan.go.jp/Japanese/guide2014/guide2014-6.html>).

コラム④ マレーシアの食事と文化

M.Irie

マレーシアでの 3 週間の中で、バディの引率のもと本当に多くの料理を食べた。同国の国民は主にマレー系、中華系、そしてインド系の民族から構成されているのと同じように、食事也多国籍であった。さらに、異なる民族の料理が融合したり、同じ料理でも地域によって微妙に異なっていたりして大変興味深かった。このコラムではマレーシアで食べた料理を紹介しつつ、食事から読み取れるマレーシア文化について、食べることが大好きな筆者が分析しようと思う。

① ニョニャ料理 —マレー系と中華系の融合—

「ニョニャ」とは、中華系移民の男性と結婚したマレー系女性のことを意味する。15 世紀後半、多くの中国人がマレー半島へ移住して現地の人々と結婚したことがルーツとされ、マラッカが発祥の地といわれている。我々もマラッカを訪問した際、中華系のバディにニョニャ料理のレストランへ連れて行ってもらった。

ニョニャ料理では主に中華料理の食材が用いられるが、そこにココナッツミルクのほか、サンバル、ウコン、レモングラス、パンダナスの葉などマレー系のスパイスが加えられるのが特徴である。また、イスラム教では禁忌とされている豚肉が使用されるのも特色である。ニョニャ料理が生まれた頃にはイスラム教が浸透していたはずだが、中華系の影響を受けて豚肉が食べられるようになったというのは社会的に大きな変化だと思った。



マラッカで食べたニョニャ料理。ココナッツのまろやかさと唐辛子の辛さが印象的だった

② 2 種類のチキンライス

チキンライスはマレーシア・シンガポールを代表する料理の一つであり、ご飯にまで染み込んだ鶏肉の旨味は日本人の口に合うこと間違いなしだろう。このチキンライスであるが、クアラルンプールとマラッカでは見た目が全く異なっていた。マラッカのものは「チキンラ

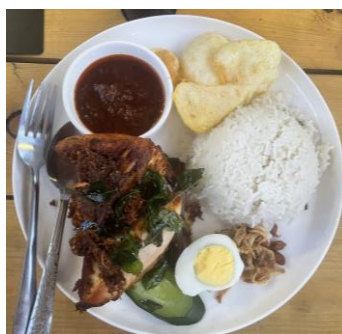
イスボール」と呼ばれ、ご飯を圧力をかけて丸めるというユニークなものである。米が丸められる理由として、弁当として持ち運びやすくするためという説もあるが、真偽は不明である。マレーシアの国土は南北に長く、またかつて王国として栄えたマラッカと植民地時代の錫鉱山の開発拠点だったクアラルンプールなど、都市ごとに発展の経緯も大きく異なるため文化的にも差異があるのかもしれないと考えた。

↓クアラルンプールのモール内で食べたチキンライス ↓マラッカで食べたチキンライスボール



③ とにかく辛いマレー料理

マレー系の料理はほとんどが唐辛子を使った辛いものだった。有名なものはココナッツミルクで炊いたご飯を鶏肉などと食べるナシレマや、こちらもココナッツミルクに香辛料が効いた麺料理のラクサなどである。私は辛い物が得意ではないためナシレマを辛いソース抜きで食べようとしたところ、バディに「それは不完全なナシレマ」と言われた。バディたちは皆当たり前のように辛い料理を食べており、育った環境によりこれほど味覚に差が出るのかと驚いた。また辛い食事とは対照的に、飲食店の飲み物はジュースもコーヒーもほぼ全てが衝撃的に甘かった。唐辛子と砂糖に翻弄された3週間であったが、初めての美味しい料理に沢山出会うことができ、幸せな経験をした。



↑ジョホールのナシレマ ↑クアラルンプールのラクサ ↑ジョホールの甘すぎるフルーツジュース

参考文献

CREA, 2015, 「チキンライスおにぎり? ご当地チキンライスもたくさん!」

(2025年4月9日取得, <https://crea.bunshun.jp/articles/-/7092?page=3>).

JTB, 2020, 「マレーシア・伝統のニョニャ料理🍲について」

(2025年4月9日取得, https://www.jtb.co.jp/kaigai_guide/report/MY/2018/08/nonya-cuisine.html).

個人エッセイ

ルックイースト政策とタイムゾーン変更

——日本へのまなざし——

H.Isono

タイムゾーンの変更

マレーシア滞在中、UTM のバディーたちと行動を共にし、趣味から宗教、政治に至るまで幅広い話題を語り合う機会があった。そんな中、日本とマレーシアの関係について、特に印象的な話を聞いた。

ある日の夕食時、マレー系のバディーが「マレーシアには日本に関する興味深い歴史があるんだけど、知りたい？」と問いかけてきた。「もちろん」と答えると、彼はタイムゾーンの地図を示した。地図を見ると、本来は経度に沿って東西に区切られるはずの時間帯の境界線が、マレーシアの部分だけ不自然に折れ曲がっている。通常、タイムゾーンは経度に従って設定されるが、マレーシアでは例外的な処理がされていた。



赤丸部分にその歪な形を確認できる

桐山宗久, 2024, 「標準時 in マレーシア」, (2025 年 3 月 9 日取得,
https://note.com/alchemy_mu/n/n0c8d519eb991).

「これは、ルックイースト政策の影響なんだ」と彼は説明した。ルックイースト政策とは、1982 年に当時の首相マハティール・モハマドによって導入された経済・社会発展戦略である。この政策のもと、多くのマレーシア人が日本へ留学し、日本企業との協力も進められた。マレーシアの近代化と経済成長に大きく貢献したと言われている。(青山 2024)

それ以前、マレー半島（西マレーシア）とボルネオ島（東マレーシア）はそれぞれ異なるタイムゾーンを採用していた。しかし、1982年に政府は、東側であるボルネオ島の時間に統一する決定を下した。これは単なる時間の調整ではなく、日本や東アジア諸国との経済的な連携を強化する意図があったという。「もしマレー半島の時間に合わせていたら、ヨーロッパ寄りの時間帯になってしまう。でも、マレーシアは日本や中国などの東アジアに近づきたかったんだ」と彼は語った。つまり、マレーシアは発展戦略の一環として、東アジア圏に時間を合わせる選択をしたのだ。

マレーシアのタイムゾーンの歪な形は、一見すると単なる地図上の違和感に過ぎない。しかし、そこには政治的・経済的な意図が込められていた。このエピソードを現地の学生が熱く語ってくれたことが、特に印象に残った。

過去の歴史と未来志向の姿勢

彼はさらに、「日本の教育制度や礼儀正しさも、マレーシアは見習いたいと思ってるんだよ」と言い、「You should be proud!」と微笑んだ。その言葉は素直に嬉しかったが、同時に戸惑いもあった。なぜなら、日本軍がかつてマレー半島を侵攻し、過酷な支配を行った歴史を事前学習で知っていたからだ。戦時中、日本軍は特に中国系住民に対して弾圧を加え、多くの犠牲を生んだ。その事実を思うと、彼が日本を一方的に称賛することに違和感を覚えた。そこで慎重に言葉を選びながら、「日本はかつてマレーシアを侵略し、人々に苦しみを与えた歴史があるよね。それでも、日本のことを尊敬してくれているの？」と尋ねた。すると彼は、驚くほど冷静に答えた。「The past is the past. We are looking at where we live. We just want to move forward.」私はこの言葉を、「過去の出来事は確かに歴史として存在するが、現在の発展を重視し、未来を見据えることが重要なのだ」と解釈した。そして、日本とマレーシアの関係は、歴史の影と発展への希望が交錯する複雑なものであることを実感した。

ただし、彼の言葉には、日本人である私への気遣いが含まれている可能性もあるため、手放しに楽観視することはできない。実際、日本の外務省（2002）が実施したASEAN6ヶ国への対日世論調査によると、第二次世界大戦中の日本について「悪い面はあったが、今となっては気にしない」と答えた人が50%、「悪い面を忘れることはできない」と答えた人が22%であった。ルックイースト政策を経た2002年時点でも、約2割の人が「忘れることはできない」と感じていることが分かる。

また、国や民族によって歴史の受け止め方は異なるだろう。もしこの会話の相手が、マレー系ではなく中華系マレーシア人だったら、異なる意見が返ってきたかもしれない。日本への評価は一樣ではなく、歴史をどう捉えるかは、個人のルーツや経験に左右される。ひとつの視点だけを鵜呑みにするのではなく、多様な意見に耳を傾けることが、異文化理解の第一歩なのだろう。

参考文献

- 青山侑, 2024, 「ルックイースト政策の光と影——クアラルンプール, マラッカ, プトラジャヤ調査結果」, (2025 年 1 月 22 日取得, <https://urban-institute.info/wp-content/uploads/2024/08/08b69cf1a862dbc9eb0b0b816500be7d.pdf>).
- 外務省, 2002, 「ASEAN 諸国における対日世論調査」, (2025 年 1 月 22 日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asean/yoron.html>).

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

マレーシアの特徴的なタイムゾーン変更を切り口に日本とマレーシアの関係性を再考する論理展開は非常に興味深かった。事前知識としてルックイースト政策は知っていたが、標準時を日本に近づけることで日本企業との連携を強化してきたという考察に関して現地のショッピングモールに伊勢丹やダイソーなど数多くの日本企業が研修中に見られた経験と照合しても大きく頷ける。また、ルックイースト政策とは裏腹に日本がマレーシアを侵攻した歴史がゆえにマレーシアの人々が日本に対して複雑な思いを抱いている場合も多いかもしれないがそれでも歴史にとらわれず未来を見据えて今を生きる彼らの姿勢は、私たちも大いに見習うべきであると思った。

ラマダーンから見るマレーシアの多文化共生

M.Irie

はじめに

我々の研修期間中の2月28日にラマダーンが始まり、行動を共にしたマレー系 musulmans の生活を近くで目の当たりにした。その経験を通して、同国において彼らがイスラム教以外の文化をどのように捉えているか、ひいては社会全体で多文化共生がどのようにして実現されているかを垣間見ることができ、大いに学びを得たため、このテーマを設定するに至った。

ラマダーン期間中の生活

まず、ラマダーンに関して簡潔に説明する。ラマダーンとは、ムスリムが日の出から日没まで一切の飲食に加えて喫煙や性行為、喧嘩などを断つ期間であり、一年のうち約一カ月間（2025年は2月28日～3月30日）続くものである。ラマダーンはイスラム教の根幹をなす行動である五行のうちの一つであり、教徒が試練を共有することで信仰を深める目的を持つとされている（Spaceship Earth 2025）。

マレーシアでは、人口の約6割がマレー系住民でありイスラム教を信仰している。本研修に参加していたムスリムはバディ三人と、インドネシアからの参加者一人の計四人であった。私はジョホールバルに移動してからの約二週間、ムスリムのバディとインドネシアの学生の一人ずつと同じ班になり、講義や食事を含めほぼ全ての行動を彼らと共にした。

ラマダーンはイスラム教において重要な慣習の一つであり、断食には苦難が伴うであろうと予想したが、その開始についてバディから公に伝えられることはなかった。ムスリムたちは断食を除いて特に以前と異なる様子を見せず、自由時間も我々の班はアクティブに外出を楽しんだ。特に印象的だったのは、ラマダーン中のあるムスリムのバディの行動である。UTMでは昼食として弁当が支給されていたが、彼は冗談交じりにその弁当の匂いを嗅いでいた。私は彼らの前で可能な限り飲食を控えようと少し神経質になっていたが、彼らにとってはこのような他教徒との共存が日常的なものであるのかもしれないと考えた。

マレー系ムスリムの他教徒への接し方

マレーシアで研修期間を過ごす中で、ラマダーンに関連する体験を含めムスリムの、他教徒（我々日本人も含む）に対する接し方について新たな発見がいくつかあった。一つ目はラマダーン期間中に班でショッピングモールを訪れた際の出来事である。ムスリムのバディは私を含む日本人の学生三人に対して、我々が昼食をとりたければ同行するし、イスラム教では禁忌とされている豚肉を食べに行くのにも付いていくと提案してくれた。我々は申し訳なさから昼食の間だけ別行動をすることを選んだが、日本の文化を受け入れて尊重して

くれたムスリムのバディの寛大さを実感したことを鮮明に覚えている。

もう一つの体験は、ラマダーン前であったが全員で UTM のモスクを訪問した際のことである。この時、女子の学生には頭髪を隠すためのヒジャブが貸し出された。それを身に付けた我々を見て、礼拝を呼びかけるムアッジンという役職の男性が“You look pretty.”と褒めてくれた。彼らからモスク内で礼拝などについて解説を受けたのち、最後には“We love you all.”と言って参加者全員の学業の成功を祈ってくれた。本来はムスリムのために建設されたモスクであるにもかかわらず、他教徒の我々を快く迎え入れ、さらに他教徒のために祈りを捧げてくれたことには大変驚き嬉しく思った。しかしこの感情は、私がイスラム教を自分自身の外部にある存在と捉え、無意識のうちに一線を引いていたことの証明かもしれないと考えた。「宗教は信仰する人々だけのためのもの」という個人的な印象を持っていたが、日本の神社や仏閣を外国人観光客が訪問しているのを見ても違和感はない。意識せずとも自分と他者を切り離してしまっていたことに気付き、異文化交流に相応しい態度ではなかったと反省した。

マレーシアの多文化共生

ここまで述べたように、マレーシアのムスリムは他文化を尊重し、他教徒に対して寛容な姿勢を示していた。一方でマレーシアのムスリムはイスラムの教えに厳格であるとされており、2011 年の調査によると「イスラム教を国家の法律にすべき」と考えるムスリムの割合は 21 か国の中で 4 位であった（社会実情データ図録 2013）。それでもなお、ショッピングモール内にはハラルフードを扱うマレー系レストランと豚肉を扱う中華系レストランが共存していたり、モールでムスリムの女性と中華系の女性が日没を待つて共に食事をしていたりするなど、社会全体で多文化共生が実現されている例が見受けられた。もちろん、マレー系住民を優遇するブミプトラ政策や人種による経済的地位の差など、国内では依然として軋轢も存在していると考えられる。しかし、バディ同士の関わり方を見ても、相手に対して民族・宗教でラベリングするのではなく、一人の人間として接しているように感じた。

このようなマレーシアでの経験を通して、異なる文化的・宗教的背景を持つ人々が同じ社会で生きていくにあたり、自らの文化を大切に受け継ぐと同時に、異なる文化を敬意をもって受け入れ、歓迎することの重要性が教訓として得られたと考えている。

参考文献

Spaceship Earth, 2025, 「ラマダンとは？イスラム教との関係と断食期間中の過ごし方・2025年の日程」

(2025年3月26日取得, <https://spaceshipearth.jp/ramadan/>)

社会実情データ図録, 2013, 「イスラム世論の国別温度差 (2011年)」

(2025年3月26日取得, <https://honkawa2.sakura.ne.jp/9036.html>)

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

ムスリムとの交流を通じたイスラム教徒の他文化への寛容性が具体的に説明されており, 多文化共生の実態を理解する上で示唆に富む内容だと感じた。筆者がイスラム教に対する距離感を乗り越え, 「他者性」を再考する姿勢に強く共感すると同時に, 異文化理解における重要な視点が示されていた。モスク訪問や断食中の配慮といった事例は, 宗教的实践と社会的共存の接点を考える上で有意義であると考えている。

マレーシア人のメイクに学ぶ他者との共生

R.Kamijima

はじめに

マレーシアでの3週間、国籍の異なる仲間との共同生活を通して日常のいろいろな場面で文化的背景の違いによる価値観の相違に直面した。コミュニケーションの取り方や食事の好み、自由時間の過ごし方に至るまで日常のほぼ全ての瞬間でそれらを感じ取ることができ、まさに異文化交流研修の名にふさわしい経験ができた。本稿では、中でも特に印象に残った女性のメイクや身だしなみに対する意識の違いを比較し、各国の美意識がどのような文化的背景のもとで形成されているのかを探る。そして、結論として、マレーシア人の化粧の捉え方を、他者理解の文脈に拡張して考察する。

ジャパニーズガールズは早起き？

「君たち日本人の女の子は集合時刻の1時間半前には起きるよね。だから僕たちより早く寝なさい。」マレーシア滞在中のある日、バディーの一人に何気なく言われたこの言葉がなぜか印象に残った。大学生女子ともなると、同調圧力の強い日本では化粧をすることは当たり前、というよりむしろマナーに近いようなきらいさえある。私自身、誰かと会う予定がある日はほぼ必ずメイクをするし、この研修で同じ部屋になった日本人女子たちも毎朝私と同じくらいの時間をかけて外見を整えていた。

ひょっとすると、これほどまでにメイクや髪を整えることに必死なのは日本人だけなのではないかと思った場面は先ほどのバディーの発言の他にもあった。ある夜、数部屋の女子で集まってカードゲームをしながら、それぞれ交代で自分の部屋でシャワーを浴びていた。その場には中国から来た参加者も何人か混じっていたのだが、日本人1人が浴室から戻ってくるまでに中国人2人がシャワーを浴び終えるようなペースだった。中国から来た彼女らは化粧が薄くメイクを落とすのにあまり時間がかからないということや、化粧を落として他人と顔をあわせることへのためらいのなさが記憶に残った。

それらの経験をした後、街中やキャンパス内で現地のマレーシア人女性のメイクに注意してみると、そもそも日本に比べて化粧をしていない人が多いということ、そして化粧をしている人たちも日本のように画一されたメイクではないということに気づいた。特にヒジャブを身につけたムスリムの女性にその傾向が強いように感じたため、次の段落ではイスラム教の価値観と化粧に対する意識との関連について考察する。

マレーシア人のメイクとイスラム教

メイクについて考える前に、まずはイスラム教における女性の扱いについて述べる。ムスリムの女性は、肌の露出を極力控え、体のラインの出ないゆったりとした服装を身に纏

うことが多い。男性にはそのような厳格な服装の規定はないこと、一夫多妻制が認められていることなどから、私は当初、男性に比べて女性は不利な立場に置かれているのではないかと感じていた。しかし、キャンパス内のモスクで敬虔なイスラム教徒の男性バディに聞いたところ、彼らは女性をとて大事な存在だと思っており、だからこそ一部の野蛮な男性やその他さまざまな危険から女性を守るためにそういった男女の区別をしているのだと語っていた。佐々木良昭(2015)によれば、イスラム世界では強い男性が女性を庇護するのは当然とされており、一夫多妻制もかつて戦争によって未亡人が多く生まれたときに彼女たちを庇護するために認められた制度だという。

信心深いムスリム女性たちは前述のような服装の戒律を遵守するため、必然的に私たちに比べて服装によるおしゃれの幅が狭められてしまう。その中で顔に化粧をほどこすことは限られた中での精一杯の自己表現であるから、それをしたいという気持ちもわかるし、また逆に、化粧をせずにありのままの自分を見せることに誇りを持つ気持ちもわかるように思う。イスラム教の聖典の解釈は一意に定め難く、これは個人的見解にすぎないが、内面の誠実さや慎みを重んじるイスラム教の下では、男性も含む他人に対して自分をより良く見せようと化粧をするところに抵抗を感じている女性もいるのではないかと思った。また、マレーシアはマレー系 70%、中華系 23%、インド系 7%(外務省 2025)と多数の民族が混在しており、民族ごとに美しいとされる外見が異なることも、化粧の画一性を弱めているだろう。これはまた、メイクの必要性を低下させる要因でもあるように思えた。

他者にとられすぎない

これまで考察したように、マレーシアの女性たちは、メイクをするかしないか、あるいはどのような化粧をするかという選択を日本人より自由にできているのではないだろうか。今回は女性の美意識に注目したが、マレーシア人はその他にもいろいろな場面で周囲の選択に左右されずに自分の意思で判断を行っていると感じた。他人に関心をもたない面があるとも言える。私たちに、「朝早起きするよね」と言ったバディーの発言についても、そこに軽蔑も同情も、何の感情も読み取れなかった。私たちの習慣を、ただの事実として受け止めていたのだろう。他人に干渉しないという姿勢は私たちもある場面で自然にっていた。イスラム教徒たちがラマダーン中で断食をしていることについて、その行動の背景を完全に理解したわけではなかったが、彼らがそのように行動すること自体を否定はしなかった。他者と共生していくうえではそのくらいの距離感がちょうどいいのかもしれない。「女性は常に身だしなみに気を遣うべき」という無意識の思い込みや、他者の目を過剰に意識することから離れ、自分の当たり前を他人に押し付けないことの大切さを、身をもって学ぶことのできた3週間だった。



中国人，日本人参加者の女子混合のモスクでの一枚

参考文献

佐々木良昭，2015，『面と向かっては聞きにくいイスラム教徒への 99 の大質問』プレジデント社.

外務省，2025，「マレーシア (Malaysia) 基礎データ」，(2025 年 3 月 21 日取得，
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>).

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

女性だからこそメイクという切り口で，中国からの参加者との比較も行いながら考察していたのが興味深かった。特に，男性と女性という二分で考えるにあたって，イスラム教において男性が女性をどう捉えているのかという観点が盛り込まれていた点と戒律を遵守するという単一の事象から「自己表現」と「ありのまま」という2つの方向性に対して理解を示している点が素敵だと感じ，勉強になった。

カラフルな国マレーシア

K.Shimizu

マレーシアはとてもカラフルな国だ。チキンは赤色に、米は青色に、ハンバーガーのパンズは緑色に染まる。結婚式の服装やお土産のバティックもカラフルなものが多いし、民家の壁の色やパトゥ洞窟の階段も実に色鮮やかだった。街もまた、個性豊かで別の意味でカラフルだ。クアラルンプールは国際的な都市として高いビルがそびえ立っているし、マラッカは香辛料貿易で栄えた海港都市としての面影を残しており、オランダに支配された歴史から都市全体が赤く染まっている。ジョホールバルはシンガポールのベッドタウンとして、夜になるとナイトマーケットや「ママー」と呼ばれる居酒屋のような場所に仕事帰りの人や学生が集まり、活気づく。では、なぜマレーシアはこんなにもカラフルなのだろうか。まず、視覚的にマレーシアがカラフルな理由として、二つの要素があると思う。



マラッカの街並み



バティック

一つ目は、生物多様性の高さだ。実は、赤道周辺に広がる熱帯雨林は地球の陸地のわずか7%ほどの面積しか占めていないが、そこに全生物種の50%以上が生息しているといわれている（古川 1991）。このように、マレーシアのような熱帯地域では、カラフルな動植物が日常の中に自然と存在しており、それが人々の美的感覚や好みに影響を与えている可能性がある。身の回りに色鮮やかなものがあふれていれば、それに合わせた衣服や装飾、建築物なども自然とカラフルになるのではないかな。

もう一つは、メラニンの量に関してだ。メラニンとは、人の目の虹彩に含まれる色素のことで、その量は人が暮らす緯度によって異なる。一般に、緯度が低い地域に住む人ほどメラニンの量が多い傾向にある（田巻 2019）。人の目に含まれているメラニンの量が多ければ多いほど人は眩しく感じにくくなり、少ないと感じやすくなる。そのため、マレーシアの人々は高緯度地域の日本人などに比べて、黄色やピンクなどの明るい色がそれほど眩しく感じられず、より鮮やかな色を自然と好む傾向があるのかもしれない。

次に、なぜマレーシアには雰囲気の異なる多様な都市が存在するのかについて考えた。これにも二つの理由があると思う。

一つは歴史的背景だ。マレーシアの都市は、一つの国の都市というよりも、それぞれの都市がまるで別の国の都市のように発展してきた側面がある。特に、19世紀ごろから第二次世界大戦後に至るまで、現地住民による統一的な統治はほとんど行われず、地域ごとにイギリスやオランダなどの外国勢力によって分割的に支配されていた。こうした統治の分断が、街と街とのつながりを弱め、それぞれの都市が独自の発展を遂げる一因となった。この歴史的背景が、現在のマレーシアにおける都市の雰囲気の多様性を形づくっていると私は考えた。

もう一つは地理的要因である。マレーシアは北にタイ、西にシンガポール、南とボルネオ島にかけてはインドネシアと接しており、こうした隣接国からの影響が地域ごとの特徴を生み出していると考えられる。言語の違いもその一例だ。たとえば、ジョホールバルではシンガポールの影響を受け、テンポの速い会話が特徴的な「シングリッシュ」が広く話されている。一方で、マレーシア全体では「マングリッシュ」と呼ばれる独自の英語方言が使われており、語尾を伸ばすなど、ややのんびりとした話し方が特徴で、リラックスした雰囲気を感じさせる。私は、こうした言語の違いが都市の雰囲気に与える影響は小さくないと感じている。あくまで個人的な意見だが、大阪の「関西弁」が大阪独特の親しみやすく活気ある雰囲気の一因となっているように感じる。それと同じように、マレーシアにおいても都市ごとの言語的特徴が、その地域の空気感や人々の気質を形づくっているのではないだろうかと思った。都市の多様な雰囲気は、歴史や地理のみならず、言葉という身近な要素によっても支えられているのだと私は考える。

ここで視点を日本に向けてみる。日本では、あまり派手な色が好まれない。面接や卒業式では多くの人が黒のスーツを着るし、伝統的な服装である和服や浴衣も、落ち着いた和の色合いが中心である。また、都市の雰囲気や街並みも、マレーシアと比べると多様に乏しく、似たような印象を受けることが私は多い。たとえば、中心市街地には同じようなガラス張りの高層ビルが並び、郊外には画一的な一軒家が連なるといった景観は、多くの地方都市に共通して見られると感じる。マレーシアのように、マラッカの「赤」やジョホールバルのシンガポールとの結びつきなど、都市ごとの個性や文化的特徴を強く感じる機会は、日本では比較的少ないように思う。

以上を踏まえると、こうした二国の色彩感覚や都市の多様性の違いは、緯度、生物多様性、地理的条件、歴史的背景といった複数の要素が絡み合った結果かもしれない。日本は高緯度にあり、生物多様性も赤道付近に比べると低く、また島国であるため他国との直接的な接触も限られていた。さらに、歴史的に他国による支配をほとんど受けなかったこともあり、都市の発展は均質的になりやすかったのかもしれない。一方で、マレーシアは赤道近くに位置し、生物多様性が極めて豊かで、さらに歴史的にも多くの国や民族と関わりを持ってきた。その結果として、街の景観や文化、色彩感覚にも多様性と鮮やかさが自然

に表れているように思える。もし、マレーシアのカラフルさと日本の控えめで均質な文化的傾向が、単なる趣味嗜好の違いではなく、それぞれの国の地理的背景、歴史的背景といったものから生まれているとするならば、それはとても興味深いと感じた。

ところでなぜ自分が色にこだわるのか。それは自分が、自分の考える一般的な日本人とは真逆の、カラフルなものを好む嗜好を持っており、日本にいとその嗜好の違いに違和感を覚えることがあるからだ。たとえば、日本の大学生は黒やグレーといった控えめな服装を好む傾向があると思うが、私にとってはそれがつまらなく感じられる。また、日本の都市景観も、個性に欠けているように見え、やや物足りなさを感じてしまう。

もちろん、これは単なる価値観の違いであり、日本が嫌いなわけではない。むしろ、今回のマレーシア研修を通して、自分の価値観と強く共鳴する文化と出会うことができたことは幸運だったと思う。ただもし、読者の中に私と同じようにカラフルなものを好み、日本の均質な文化に少し閉塞感を感じている人がいるなら、こう伝えたい。「マレーシアに行ってみたら？」と。そこには、日本とはまったく異なる、色と個性に満ちた文化が広がっていると研修中に私は感じた。私が感じたようにあなたも新たな心地よさに出会えるかもしれない。

参考文献

- 古川昭雄, 1991, 「熱帯林生態系の構造解析」, 国立環境研究所ホームページ, (2025 年 3 月 26 日取得, <https://www.nies.go.jp/kanko/news/10/10-3/10-3-04.html>) .
- 田巻小百合, 2019, 「太陽をどんな色で描くかで出身国もわかる?!」, (2025 年 3 月 26 日取得, https://onsuku.jp/blog/color_knowledge_004) .

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

このエッセイで触れられているとおりマレーシアにはカラフルなものが多く、研修中は町中が赤、黄、緑、青…といった様々な色であふれている光景を目にした。私はこの要因について考えたことがなかったので、生物多様性やマレーシア人の色の見え方がカラフルさを生んでいるという考えはとても興味深く感じた。

都市の多様性に関しては支配国や隣接国といった外国からの影響に言及があったが、それ以外に現地の民族からの影響もあるのではないかと思った。マレーシアには様々な民族が住んでおり、例えばマレー系が多い都市と中華系が多い都市があるはずだ。こういった差が生む雰囲気の違いについても知りたいと思った。

望ましい「自然」とは？

S.Nishina

雑談から浮かび上がった私の自然観

ジョホールバルでの研修はバス移動が多い。大学のキャンパス付近には電車が通っていないためである。ある日私はバスの窓を覗いたとき、森林が伐採され一部の木々が規律正しく点々とそびえたつのが見えた。私は思わず、「なんてひどいんだ」と口にしてしまった。すると、隣に座っていた学生が「特定の木々に栄養を集中させるために間引きをしているだけだ」と指摘してくれた。



実際に窓から見えた間引かれる森林の様子（撮影：筆者）

この会話から私は、人の手が加わっていない自然が望ましいと考えていたことに気づいた。友人が私に内面化されている価値観を浮き上がらせてくれたのだ。しかし、この価値観を形成したものは一体何だろうか。本エッセイでは、私の自然観形成に影響を与えたものを、ある施設の訪問と文献の調査を中心として考察する。

Forest City 訪問を振り返る

考察を始める前にまず私は、研修中に Forest City を見学した時のことを思い出した。そもそも Forest City とは、” A Prime Model of Future Cities ” を謳った都市開発事業のことである（Forest City 2025）。その名の通り緑化活動に重点を置いており、研修でも木々が街中に植えられているのを確認できた。また観光客向けに当該都市を紹介する施設では、二酸化炭素の削減量などが宣伝されていた。しかし私はこの街から、人々の活気ある暮らしを感じ取ることができず虚しさを覚えた。なぜなら、Forest City で活動する人の数があまりにも少なかったからだ。

BBC（2023）によると、顧客として見込んでいた中国の富裕層の移住が想定を大きく下回ったため、Forest City は現在ゴーストタウン化している。この事実から、私が Forest

City で虚しさを感じた理由がわかる。それは、人との調和のために整えられた自然における人々の不在だ。

経済活動、教育、文化の視点から

本段落では、私の自然観に大きく影響を与えたと考えられるものについて人々の経済活動、教育や文化という点から考察を進める。

まず、経済活動と環境の関わりを考える。桑田（2023）は、経済について考えることと自然や環境について考えることを別物にして切り分けるべきではないと述べている。彼の言うとおりに考えると、人の手が全く関与していない自然など存在しない。なぜなら、化石燃料の大量生産・消費という人間活動によって増加した二酸化炭素量に影響を受けていない自然は存在しないと考えられるからだ。桑田の指摘によって、私は経済と自然との関わりが必然的なものだという事実に気づくことができた。

次に、日本教育が自然観に影響を与えた可能性を探る。武藤（2007）は、社会科学と自然科学が二分されている日本教育を前提にしたうえで、自然科学は実験によって、社会科学は歴史によって検証するという方法が違うだけであり、科学の本質は懐疑にあると述べている。しかし、自然科学と社会科学は本質的に異なるもののような扱いを受けている。例えば、高等教育における文理選択だ。このような教育体制が、「自然は社会・人間活動と離れている」という認識を私に抱かせたのだと推測できる。また、教育制度が自然観形成に影響するならば、多くの人々が私の自然観に類似するものを持つのではないかと推測できる。

最後に、ロマン派以後のヨーロッパにおける自然観と私の自然観を比較する。岩井（1995）によると、中世の人々は自然に対して忌避的な感情を抱いていたが、ロマン派文学の影響によって自然を美しいものとして賛美するように変化した。これは、私の自然観と同様のものである。つまり、私の自然観は地理区分で言うとヨーロッパ、時代区分で言うとロマン派以後というかなり限定されたものに大きな影響を受けている。私が自明とする価値は、普遍的な価値を持っているわけではないと気づくことができた。

結論と仮説設定

これまでの文献調査を通して、教育制度やヨーロッパ由来のロマン派思想が私の自然観形成に大きく影響していたことが分かった。そして Forest City での経験は、すべての人間活動は自然に関与していることを私に気付かせてくれた。最後に、1つの仮説を立てて本エッセイの締めくくりとしたい。世論調査によると、日常生活で脱炭素社会に向けた取り組みを行いたい人の割合は前回の調査に比べて減少している（内閣府政府広報室 2023）。この原因の一つは、私のもつ自然観、つまり経済や社会といった人間活動と植物などの自然を分けて捉えることにあるのではないか。なぜなら、本文でも述べたように教育制度が自然観形成に影響するため、多くの人々が私の自然観と類似するものを持つと考えられるからだ。脱炭素社会の実現のためには、このような自然観を自己批判し、普段の

生活が自然に対して与える影響を考える機会を増やすことが求められる。

参考文献

- Forest City, 2025, "FOREST CITY" (Retrieved March 25, 2025, <https://forestcity-jb.com/en>).
- BBC, 2023, "Forest City: Inside Malaysia's Chinese-built 'ghost city'", (Retrieved March 25, 2025, <https://www.bbc.com/news/business-67610677>).
- 桑田学, 2023, 『人新世の経済思想史：生・自然・環境をめぐるポリティカル・エコノミー』 青土社.
- 武藤徹, 2007, 『武藤徹著作集 第2巻 自然観・社会観の誕生-科学教育論』 合同出版株式会社.
- 岩井洋, 1995, 「ヨーロッパおよびドイツ文学に表れた自然観についての歴史的考察 I：環境文化論の視点に基づく比較文化論的考察」『酪農学園大学紀要 人文・社会科学編』 20(1)：85-96
- 内閣府政府広報室, 2023, 「気候変動に関する世論調査」の概要」（2025年3月25日取得, <https://survey.gov-online.go.jp/r05/r05-kikohendo/gairyaku.pdf>）.

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

環境問題が顕在化する今日、「豊かな自然」や「望ましい自然」といった言葉は、さまざまな文脈で頻繁に用いられている。私自身もこれまで深く考えずに使っていたが、その定義は実は曖昧であり、個々人のバックグラウンドや価値観によって大きく左右されるものだと気づかされた。

本レポートでは、Forest Cityでの違和感を出発点に、「人の手が加わっていない自然が望ましい」という無意識の価値観が振り返られている。そして、その価値観には、これまで受けてきた教育、とりわけヨーロッパ由来のロマン派思想の影響が大きいことが分析されている点が興味深い。特に、ヨーロッパの自然観の歴史から自身の自然観のルーツをたどるという視点は新鮮であり、勉強になった。

マレーシアで親しまれる日本文化

N.Hamanaka

はじめに

私がマレーシアを訪れた際、異国の雰囲気とともにどこか懐かしさも感じた。それは、マレーシアにおいてショッピング、食事をはじめとした多くの場面で広く日本の文化が見られたからにほかならない。本エッセイではそれらの文化を紹介するとともに、なぜマレーシアで日本文化が根付いているのかを考察する。

実際に見た日本文化

まず目についたのは、クアラルンプールのショッピングモールにあった日系企業の店舗である。写真のようにドン・キホーテやユニクロ、無印良品といった多数の日系企業が出店



しており親近感を覚えた。またバディから「あれって日本の会社だよね」と話題を振ってくれることも多々あり、現地人からの日本に対する親しみを感じた。

食べ物も日本のものがいくらか売られていた。例えばどのフードコートに行っても、たこ焼きや鉄板焼き、寿司といった日本料理を出す店舗がたいてい一つ以上ある。しかしこういった場所での日本料理は、私たち日本人が慣れ親しんだものとは違っていることが多かった。例えば寿司にはかなり味の濃いソースがかかっており、素材本来の味を楽しむ日本の寿司とは大きく異なるのだとバディに教えてもらった。スパイスを使うしっかりした味付けに慣れているマレーシア人にとっては、ソースの濃い味が重要なものかもしれない。バディによると、現地の人々はこれらが本場の日本食とは別物であることは知りつつ、そういうものとして楽しんでいるという。このように、日本文化はマレーシア人にとって親しみやすいように形を変えつつも、現地でなじんでいるということが分かった。

考察

以上のようにマレーシアには様々な日本文化が存在していたが、なぜこれほどまでに日本文化が見られるのだろうか。経済的・社会的な観点からそれぞれ考える。

まず経済的に考えていく。マレーシアには日系企業の進出が進んでおり、日本文化の普及に一役買っている。これには日マレーシア経済連携協定が影響していると考えられる。2005

年に結ばれたこの協定によって、両国間での関税の撤廃やビジネス環境の整備が行われており、これによって貿易の積極化が進んでいる。また特にアパレルメーカーは以前からマレーシア近隣諸国に多数の工場を持っており、そこからの輸送費が安いと、積極的にマレーシアに参入したのではないかと考えられる。例えばユニクロはその象徴的な例である。ユニクロは基本的に自社工場を持たず、外部の工場と取引してユニクロ製品の製造を依頼する形をとっている。それらの取引先工場は、マレーシアにこそないものの、アジアには実に多くある。公開されている主要取引先 146 工場の内訳が、バングラデシュ 8 拠点、カンボジア 4 拠点、中国 87 拠点、インドネシア 13 拠点、日本 3 拠点、タイ 3 拠点、ベトナム 28 拠点といった具合である（三島，MONOist 2017）。これらの国の多くは日本より人件費が安い。人件費を抑え、安価に製造した製品を日本に輸送することで、日本で製造し販売するより商品価格を安く設定できるのだ。こういった経緯から、ユニクロはマレーシアに出店する前にすでにアジアに工場を持っていたのである。マレーシアに出店するにあたって、これらの工場、特にマレーシアに近い位置にあるインドネシアやカンボジアの工場から出荷すれば、輸送費がかなり安く抑えられる。こういった理由から、アパレル企業は特にマレーシアに参入しやすかったと考えられる。

また社会的な観点からいうと、マレーシアという国自体が異文化を受け入れることに寛容な雰囲気を持っていると感じた。マレーシアは多民族国家であることから文化の多様性が高い国である。マレー系や中華系、インド系の三大民族があるということは有名であるが、それ以外にもタイ系や、マレー系と他の国々の混血の人々がいる。三大民族以外の人数は年々増加しており、それぞれの文化を生かしながら暮らしている（青山，池田 2015）。私の体感としては、食べ物に関してはその傾向が特に強く感じられ、マレー系と中華系の混血（ババ・ニョニャ）などといった様々な民族の料理店が見られた。異なるルーツを持つ人々が各々の特色を出しながら共存するという、多様な文化を受け入れやすい土壌があるからこそ、日本の文化もマレーシアで広く受容されているのではないかと考えられる。

参考文献

外務省, 2017, 日・マレーシア経済連携協定

(2025 年 3 月 26 日取得)

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/fta/j_asean/malaysia/index.html

青山貞一, 池田こみち, 2015, 多民族国家マレーシアの概要

(2025 年 3 月 26 日取得)

<https://eritokyo.jp/independent/aoyama-kota0000r..html>

三島一孝, MONOist, 2017, ユニクロが 7 カ国 146 拠点の主要取引工場を公開, 生産の透明性確保へ (2025 年 3 月 26 日取得)

<https://monoist.itmedia.co.jp/mn/articles/1703/02/news070.html>

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

マレーシアを自分と真反対の見方でとらえていたのがとても面白かったです。特に社会的観点から「なぜマレーシアに日本文化が広がっているのか」を考察している段落では自分のエッセイと似たようなことが書かれていて、とても共感できました。読後に浮かび上がった疑問としては、UTS の上野さんもおっしゃっていたように、マレーシア以外にも日本文化はたくさんの国に広がっていると思うので、マレーシアならではの日本文化の展開があるのか、あるとしたらどのようなものなのかが気になりました。また世界中にあるユニクロやドンキ、寿司以外でマレーシアにしかない、またはアジアにしか広がっていない日本文化にはどのようなものがあるのかも気になりました。

Mat Rempit と Bumps から考えるマレーシア人の性格

K.Fukaya

はじめに

ジョホールバルで過ごした 2 週間は、キャンパスから出て行動することが多く、Grab という配車サービスを用いた移動が主であった。UTM のキャンパス内や街中の道路には数多くのコブがあり、Grab タクシーで移動する際、車体がいつもガタンガタンと揺れていた。このエッセイでは、そのコブの正体や背景について扱う。

Bumps

バディさんにこれについて聞いてみたところ、「夜中に mat rempit が自動車、特にオートバイのスピード出せないようにするために設置されているもので、学校や政府機関、病院や住宅地、混雑しているエリアによくある」という説明をしてくれた。コブの正体は bumps というもので、特に mat rempit という暴走族を念頭においたものだということがわかった。暴走族のようなものについては滞在中に見聞きしたことがなかったため、一旦日々の Grab タクシーでの移動を振り返ることにすると、確かに運転が荒いと感じる場面はいくつかあったように思われる。例えば、進行方向を変えるため、U の字を描くようにして対向車線に侵入する際、全然減速せず、むしろアクセルを踏むといったことである。また、在マレーシア日本国大使館によると、マレーシアでは割り込みや無理な追い越し運転、バスやオートバイの無謀運転が多く、クアラルンプール市内では 100 万人が無免許で運転しているという報道もあるとのことであった。

Mat Rempit

次に、mat rempit について調べてみると、フランスの公共放送機関の AFP 通信 (Agency France-Press 2010) によって以下のような報道がなされていた。

マレーシアのクランタン州 (Kelantan) は 16 日、公道で違法レースを繰り広げ社会問題化している暴走族を一掃するため、1000 万リンギット (約 2 億 8000 万円) を投じてサーキットを建設する計画を発表した。

「マット・レンピット」の名で知られている暴走族は、改造して馬力を高めたバイクや自動車を乗り回し、市街地や郊外の一般道で夜中に違法レースを行っては事故を起こして人々を恐れさせている。対策もたいして効果がなく、当局は常習犯へのむち打ち刑、免許停止、車両押収など、罰則の強化に踏み切っていた。

15 年前とは言え、国家レベルで多額を投じて対策に乗り出すほど大きな問題であったことがわかる。

マレーシア人は乱暴で無秩序なのか？

運転の荒さや暴走族を念頭に置いた物理的な仕組みの導入などを考えると、マレーシア人は乱暴で無秩序なのではないか？という疑問が浮かぶ。そこで、交通事情から浮かんだこの疑問について他の面から検討してみる。まず、運転の荒さについては、マレーシア人の「自由さ」の表れと捉えることもできるのではないかと考えた。3 週間過ごす中で、突然の大雨にスケジュールを狂わされたり、急なアクシデントでアクティビティが削られたりすることがあったが、バディさんたちはあまり動じていなかったように思える。これは、あまり周りを気にしないという一種の「自由さ」と呼べるのではないかと思った。続いて、無秩序で法令遵守意識が薄いのではないかという点について考える。この点について考えるにあたって真っ先に思い浮かんだのは、イスラム教との関連である。キャンパス内での飲酒や喫煙に関するアナウンスはかなりの回数行われ、実際キャンパス内にも複数の看板等が設置されていた。これから考えるに、一概に無秩序で規律を守る意識が薄いというわけではないと言えよう。

おわりに

当初の感想としては、横断歩道がない代わりにずいぶんと大掛かりなものを導入しているなという程度でしかなかったが、インタビューやリサーチを通して、運転マナーと **mat rempit** という背景について知ることができた。また、そこから国民性やマレーシア人の特徴として考えられそうな乱暴かつ無秩序という 2 つの論点について検討し、「自由さ」およびキャンパス内の規律の遵守から否定することができた。身近な事象から興味を広げ、抱いた疑問に対して他の面から検証するという流れの中で異文化について考えることができたのは自分の人生において大きな財産になったと感じた。

参考文献

在マレーシア日本国大使館, 2014, 「交通事情と交通事故対策」, 在マレーシア日本国大使館ホームページ, (2025 年 3 月 26 日取得, <https://www.my.emb-japan.go.jp/Japanese/guide2014/guide2014-6.html>).

Agence France-Presse BB News, 2010, 「2 億円かけ「暴走族用」にサーキット新設, マレーシア州当局」, Agence France-Presse BB News ホームページ (2025 年 3 月 26 日取得, <https://www.afpbb.com/articles/amp/2726945>) .

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

マレーシア滞在中, 道路のデコボコには気づいていたものの, その理由までは深く考えることがなかった。mat rempit と呼ばれる暴走族の存在も今回初めて知り, 興味深く読むことができた。道路のコブという身近な題材からスタートし, マレーシア人の国民性にまで思考を広げていく構成がとても印象的だった。特に, 現地で体験した運転の荒さやその後のリサーチから容易に想起される「マレーシア人は乱暴で無秩序なのか」という問いを提示したうえで, 彼らの自由さやイスラム教の規律の遵守という観点からそれを否定するという展開は意外で読み応えがあった。全体を通じて, 表面的な印象にとどまらずに他者への理解を深めようとする誠実な姿勢が見てとれ, 異文化交流研修の意義を改めて感じられた。

「境界」が織りなす共存の形

—マレーシアにおける多民族社会の空間と言語—

T.Matsuzaki

はじめに

本異文化交流研修でのマレーシア滞在は、多民族共存の在り方を実感する貴重な機会となった。私はこれまで日本を「単一民族国家」と認識していたが、それは日本社会における民族的多様性を意識する機会が少なかったからかもしれない。マレーシアで異なる文化や宗教を持つ民族が共存する様子を目の当たりにし、自身の認識の偏りに気づかされた。日本にもアイヌや琉球の人々、在日コリアンなど多様なルーツを持つ人々が存在するが、日常生活でそれらを意識する場面は限られている。一方、マレーシアでは民族ごとの違いが街並みや言語、生活習慣に明確に現れ、それらが共存の仕組みとして機能していることが印象的だった。特に多民族社会における「境界」の存在が興味深く、それは都市空間の構造や言語の使い分け、人々の行動パターンにも表れていた。

日本における「多文化共生」は異なる文化が共存するための努力を伴うという印象があるが、マレーシアではそれが日常の中で自然に機能しているように感じられた。そこで本稿では、マレーシアの都市空間と言語の側面から、多民族共存を支える境界の役割について考察する。

物理的な境界：都市空間と食事

多民族国家において、異なる民族がどのように共存するかは社会の成り立ちに大きな影響を与える。マレーシアでは、異なる民族、宗教の人々が物理的に隣接しながら生活している様子が珍しくない。例えば、クアラルンプールの中心部ではモスクやヒンドゥー寺院、中国系の寺院が同じ地区内に建てられている。これは単なる物理的な隣接ではなく、共存のあり方を象徴しているとも考えられる。また、礼拝の時間にはモスク周辺が賑わったり、音楽が流れたりしている一方で、中華系の店舗では何事もないかのように普段通りの営業が続いている様子も見受けられた。

ここで重要なのは、それは「融合」ではなく、それぞれの文化や慣習を維持したままの「共存」である点だ。この状況は「文化的多元主義」にあたり、異なる文化が独自性を保ちつつ、共存する社会構造を示しているのではないかと考える。「文化的多元主義」とは、異なる文化が共存しながらも互いに同化を強いられず、独自のアイデンティティを維持する考え方である（小西 1997）。この考え方は、異なる文化が共存しつつも、互いに干渉しないことで安定する社会モデルを示す。この視点から見ると、マレーシアの都市空間は多文化が交わる場でありながら、各コミュニティが自らのアイデンティティを維持でき

るように設計されていることが分かる。

一方、日本では外国人コミュニティが形成されているものの、それらは特定の地域に集中する傾向がある。例えば実際、横浜中華街や神戸南京町などでは、特に中華系の外国人がまとまって暮らし、独自の文化を維持している。このような地域では、外国人コミュニティが日本社会全体に溶け込むというよりも、むしろ「異文化の空間」として独立して存在している。中川（2016）によると、外国人居住者は特定のエリアに集中し、各地域で異なる文化的特性を持つコミュニティを築いている。このように、日本の多文化共生は外国人が特定の地域に集住し異文化が隣接してはいても、互いに影響を与え合わない、いわば「棲み分け」のような状況にあることが分かる。

このような対比は、食文化の受容にも表れる。マレーシアでは市場やフードコートでハラル食品の店と非ハラルの店が並び、異なる食文化が自然に共存している。実際、私たちのバディーにはムスリム、ヒンドゥー教徒、中華系のメンバーがいたが、食事の場面でも互いの文化を尊重しあう姿勢が垣間見られた。例えば、私たちが豚肉料理を食べていても、ムスリムのバディーは特に気にすることなく会話を続けていた。また、牛肉を扱う店に行こうとした際、ヒンドゥー教徒のバディーは、「牛肉以外のメニューがあれば大丈夫」と言い、自分の信仰を守りながらも他者の選択には干渉しなかった。このように、それぞれの価値観や宗教を尊重しながら、必要以上に介入しない距離感が共存を可能にしているのではないかと感じられた。この関係性は、Allport（1968）の接触仮説、すなわち異なる集団が適切な条件の下で接触することで偏見が軽減され、相互理解が促進されるという理論にも通じる部分がある。これより、異なる文化が日常的に接触しながらも相互に尊重し合う場面が多いことは、共存の安定に寄与しているのではないかと考えられる。

言語の境界：スイッチングによる共存の調整

こうした共存の在り方は、言語の境界においても見られる。マレーシアでは、公用語であるマレー語のほかに英語・中国語が日常的に使用される。実際のコミュニケーションを観察していると、会話の中で複数の言語が切り替えられる「コードスイッチング」が頻繁に行われていた。これは単なる意思疎通の手段ではなくて、社会的な境界を調整しながら共存を維持するための手段となっている。

例えば、街中では華人の店主がマレー系のお客さんとマレー語で話した後、中華系の客とは中国語に切り替える場面を何度も目撃した。また、私たちのバディーも英語・マレー語・中国語を状況に応じて使い分けていた。特に多民族が集まる場面では、より広く理解される言語を使用し、特定のコミュニティ内では母語を話す。この柔軟な使い分けは、フィッシュマン（1974）のいうドメインごとの言語選択の典型例であり、多民族社会におけるスムーズなコミュニケーションを可能にしている。

日本と比較すると、日本の多文化共生においては外国人が日本語を学ぶことで社会に適応することが求められる傾向が強い。つまり、日本語を共通の言語として受け入れること

が多文化共生の前提となっているのである。外国人労働者や留学生の多い地域では、ある程度のバイリンガル対応が見られるものの、言語の使い分けが共存の仕組みとして機能しているわけではない。この違いは、多文化共生のスタイルの違いを如実に反映している。

まとめ

マレーシア社会は「フレンドリー」と表現されることも多いが、その根底には異なる文化を尊重し、無理な同化を求めず、適度な距離を保ちながら共に生きる姿勢があると考えられる。都市空間では接点を持ちながらも干渉しすぎない距離感が確保され、言語の使い分けによって人々の関係性が調整される。この寛容な共存こそマレーシア多文化社会の特徴であり、異文化が隣接しつつも互いに尊重しあう形で成り立っている。それが境界によって巧みに調整されているのだ。

これは、日本の「棲み分け」型の多文化共生とは異なり、単なる都市構造や政策の範疇を超え、多文化を受容する社会の姿勢そのものの違いを反映している。マレーシアの多文化共生から学べる点が多いが、日本社会にそのまま適用することは、国民性や歴史的背景を考慮すると難しいだろう。しかし、共生の実現に向けては適度な距離を保ちながらも文化を尊重しあう姿勢が求められると考える。

参考文献

- 小西中和, 1997, 「文化的多元論」から「多文化主義」ヘーデューイのナショナリズム論の今日的意義によせて『彦根論叢 第 305 号』: 267-287,
- 末廣拓登, 2020, 「横浜中華街」の形成過程とその要因に関する研究」
- 辺清音, 2018, 「都市空間におけるチャイナタウンの再開発—神戸市南京町の中華表象生成を中心に」『華僑華人研究 第 15 号』: 7-25,
- 中川雅貴, 2016, 「外国人集住地区の分布と集住地区居住外国人の特性に関する分析」
- G・W・オルポート, 原谷達夫・野村昭 共訳, 1968, 「偏見の心理」, 培風館
- フィッシュマン・J・A, 湯川恭敏 訳, 1974, 「言語社会学入門」大修館書店

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

マレーシア社会の多文化共生の様相を文化人類学的・言語学的アプローチから分析し、日本社会との比較にまで踏み込んでいる点で非常に深みがありかつ実践的なエッセイであった。特に「コードスイッチング」に関して、主にバディー同士で話が盛り上がった時や細かい予定を調整する時などに第一言語への切り替えが行われていたように思う。その後、に我々日本人学生へ英語で内容を伝えてくれることが多く、同一民族間で共通認識を作ってから他民族へ伝達するという形式が、まさに境界を調整して円滑にコミュニケーションを図る手段として機能していると感じた。

ゴミ箱のある街，ない街

——マレーシアと日本のゴミ事情から考える「当たり前」——

A.Morita

はじめに

異文化の中で生活していると、ふとした瞬間に「自分にとっての当たり前」が揺らぐことがある。私にとって、その瞬間はマレーシアの街中で訪れた。

滞在二日目、飲み終えたペットボトルを手にしたまま、無意識に「どうしよう」と立ち止まった。しかし、周囲を見渡すと、すぐそばにゴミ箱がある。駅にも、ショッピングモールにも、道端にも、あらゆる場所にゴミ箱が設置されていた。私はほっとしながら、ゴミを放り込んだ。その瞬間、ある種の解放感を覚えた。

日本では1990年代以降、駅や公共施設からゴミ箱が撤去され、「ゴミは持ち帰るもの」という意識が社会に根付いている。だからこそ、私は「公共の場でゴミを捨てる」という行為に、一瞬戸惑いすら感じたのかもしれない。この小さな出来事をきっかけに、日本とマレーシアのゴミに対する価値観の違いが気になり始めた。

「捨てる責任」と「管理する責任」

現地の学生と話をして、マレーシアのゴミ事情を知るにつれ、「ゴミを捨てること」に対する社会的な責任の捉え方が、日本とは根本的に異なることが見えてきた。

日本では、家庭ゴミの分別が細かく規定されており、住民が決められたルールに従ってゴミを処理することが求められる。たとえば「燃えるゴミ」「燃えないゴミ」「資源ゴミ」など、多くの自治体では細かい分類が必要であり、ルールを守らないと回収されないこともある。ゴミを「出した後」も、個人の責任が問われる社会なのだ。

一方、マレーシアでは2015年に一部都市でゴミの分別が義務化されたものの、実施率は低く、リサイクル率も22%にとどまる（日本貿易振興機構2023）。「ゴミは捨てるもの」という意識が強く、処理の責任は個人ではなく、自治体や清掃業者に委ねられているのだ、とマレーシアの学生は語った。私は、ククップ島に向かう途中の沿岸部で、ゴミが蓄積している様子を目にした。その光景は、ゴミの「捨てやすさ」が必ずしも環境負荷の軽減にはつながらないことを物語っていた。



この違いを目の当たりにしながら、私は「ゴミを捨てた後の責任」とは一体誰にあるの

かを考えさせられた。公共のゴミ箱が多いマレーシアでは、「ゴミは適切な場所に捨てれば良い」という考え方が主流なのに対し、日本では「そもそもゴミを減らす努力を個人が担うべきだ」という前提がある。これは、単なる制度の違いではなく、社会が前提とする「責任」の概念そのものの違いなのかもしれない。

ゴミ分別の難しさ

もう一つ、日本のゴミ処理制度について考え直すきっかけとなったのは、「分別の厳格さが、必ずしも環境負荷の軽減につながるわけではない」という点だった。

日本の分別制度は細かく、ペットボトルはラベルを剥がし、キャップを分け、資源ゴミとして出すことが求められる。この徹底した仕組みにより、日本のペットボトルのリサイクル率は 86.9% に達している（PET ボトルリサイクル推進協議会 2023）。しかし、この厳格さは利便性を犠牲にしており、観光地やイベント会場では、ゴミの分別ルールが分かりにくく、適切に処理されないケースも多い。現に、マレーシアの学生には、「日本ではそんな面倒なことをしているなんて、信じられない」と言われてしまった。

実際、東京オリンピックの際には、多くの海外観光客が分別ルールを理解できず、会場周辺でゴミが溢れる事態が発生した。一方、マレーシアのペナン州では 2014 年にプラスチック袋の無料配布を禁止し、リサイクル可能なゴミのみを回収する曜日を設定することで、2019 年にはリサイクル率を 47% まで向上させた（Penang Green Council 2022）。この取り組みは、「分別の厳格さ」よりも、「分かりやすさ」と「実践しやすさ」がリサイクル率向上の鍵であることを示している。

つまり、日本の制度が「理想的」であるとは限らない。私が「日本のゴミ分別は先進的だ」と信じていたこと自体が、日本の価値観に基づいた勘違いだったのかもしれない。

おわりに

今回の研修を通じて、私は「当たり前」と思っていた日本のゴミ処理制度が、決して唯一の正解ではないことに気づかされた。日本の制度は環境負荷の軽減に貢献しているが、その厳格さが利便性を損ねる側面もある。一方、マレーシアの制度は利便性を優先するあまり、環境への負担が大きくなっている。

重要なのは、「どちらの制度が優れているか」を問うことではなく、「それぞれの文化や価値観に適した持続可能なシステムをどう設計するか」を考えることだ。ペナン州の取り組みが示すように、適切な政策の導入と住民の意識改革を組み合わせれば、利便性と環境保護の両立は可能である。

異文化の中に身を置くことは、自分の中の前提を疑い、新たな視点を得る機会を与えてくれる。マレーシアでの経験を通じて得たこの学びを、今後もさまざまな場面で活かしていきたい。

参考文献

- Penang 2030, 2021, “Penang’s War Against Plastic”, Penang 2030 ホームページ,
(Retrieved March 26, 2025, <https://penang2030.com/2021/07/penangs-war-against-plastic/>).
- Penang Green Council, 2022, “Penang in Numbers: Green Data (Goal 11),” (Retrieved March 25, 2025, <https://www.pgc.com.my/2020/wp-content/uploads/2022/04/Green-Data-GOAL-11-Sustainable-Cities.pdf>).
- 日本貿易振興機構, 2023, 「マレーシアのリサイクル産業— プラスチックリサイクルを中心に—」 (2025 年 3 月 25 日取得,
https://www.jetro.go.jp/ext_images/Reports/01/a1a64ca81cb40e02/20230004.pdf) .
- 日本貿易振興機構, 2024, 「アジア大洋州主要国のサーキュラーエコノミー実態調査」
(2025 年 3 月 25 日取得,
https://www.jetro.go.jp/ext_images/Reports/01/4713697e5193d214/20230046.pdf)
.
- PET ボトルリサイクル推進協議会, 2023, 「PET ボトルリサイクル年次報告書 2023」,
(2025 年 3 月 25 日取得, <https://www.petbottle-rec.gr.jp/nenji/2023/2023.pdf?231122>).

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

マレーシアでの生活の中で気づいた、「ゴミ箱が街中に設置されている」という事実から、単純に「ゴミを捨てる意識があるのだな」と感じていた私と違い、そこから一歩踏み込んでゴミの分別に対する意識の薄さに関連づけているところが面白いと感じた。また、「ゴミは分別したほうが良い」という無意識に私たち日本人に根付いていると思われる考えに異議を唱えており、読んでいる側の価値観をも揺さぶり、考えさせるテーマを与えるレポートになっているのではないかと思う。このレポートを読んで、ゴミのリサイクルの仕方の最適解が必ずしも一つではない可能性を知り、実際のところ、わかりやすさを重視したリサイクルと、分別を重視したリサイクルでは、結果的にどちらの方が環境に与える好影響が大きいのかを調べてみたいと感じた。

オレオ流通の謎

I.Yamashita

はじめに

今回の海外研修では、クアラルンプール、マラッカ、ジョホールバルのいずれの地域でも、コンビニやスーパーでオレオやその類似品が大きなスペースを割いて販売されていることが印象に残った出来事の一つであった。また、イメージ通りのオレオ以外にも筒状で中にチョコレートが詰められた、日本のトッポのような形状の製品、日本では見られないレッドベルベット味やクリーム2倍などのユニークなものまで展開されていた。価格面でも、マレーシアの物価を考慮しても日本に比べて安価であり、さらに品質がほぼ変わらない類似品が数多く流通していることが確認できた。この何気ない発見が私の持つ多民族国家への認識を改める機会となった。本報告書ではマレーシア内でのオレオ流通の原理に考察するとともに、そこから得た私の多民族国家というものに対する知見をまとめる。

オレオの流通の謎の解明

オレオは世界的に有名なビスケットブランドであり、マレーシア市場でも広く販売されている。オレオのマレーシア国内販売製品はマレーシア・イスラム開発局(JAKIM)によるハラール認証を取得しており、イスラム教徒でも安心して購入できる。この制度は、イスラム法に則った食品の生産・加工・流通を保証するものであり特に、イスラム教徒が国民の過半数を占める(外務省 2025)マレーシアではハラール認証が消費者の購買行動に強く影響を与えるものである(ハラール・ジャパン協会 n.d.)。また、マレーシア国内にはオレオの製造工場があり、輸入品に比べて価格が抑えられ、供給が安定しており、加えてスーパーやコンビニエンスストア、オンラインショップなど幅広い流通網を通じての販売が行われている。実際の価格として、スーパーマーケットではオレオ(133g)が約RM2.50～RM3.50(約80～120円)で販売されていることが確認された。マレーシアでは、オレオの他にも異なる会社の製品として、CreamOと呼ばれるものやその他の類似品が多数流通している。私もCreamOを実際に食べてみたところ、オレオと遜色ないクオリティであった。これらのブランドもハラール認証を取得し、オレオと競争を繰り広げている。特に、地元企業による製品は価格競争力があり、消費者の選択肢として定着している。CreamOはオレオよりもやや低価格で、同じ133gサイズでRM2.00～RM2.80(約65～95円)で販売されていた。

また、マレーシアではミロ(Milo)やお茶と一緒にクッキー菓子を食べる文化が根付いており、実際に研修中ほぼ毎日3時ごろに飲み物とビスケットを中心とした菓子類が提供された。このことから、ビスケット類の消費が高い傾向にあると推測される。加えて、朝食やティータイムにビスケットを浸して食べる習慣があるようで、これもオレオやその類

似品の流通拡大の一因となっているのではなかろうか。

民族間の架け橋の代表的存在オレオ

このようにイスラム教徒が多くを占めるマレーシア内での企業努力やティータイム文化によって国内で広く流通しているオレオだが、さまざまな民族が共存して成り立つマレーシアという国において場所を問わず流通しているというのはそれぞれの民族文化の共通項を担っていると私は考える。実際、研修中何度もコンビニエンスストアを訪れたがそのコンビニがチャイナタウンの中だろうとムスリム建造物の近くの店舗だろうとオレオを中心とした同じ種類のビスケット菓子や紅茶が販売されているのを確認できた。この事実は、多民族国家を同じ地域内で文化同士が一定の線引きをした上でそれぞれが独立して存在しているいわば小国家の集まりと認識していた私にとっては非常に新鮮な発見であった。確かに民族ごとに文化レベルでは互いに侵食し合わないよう線引きがされているのは事実であるが、日常生活レベルにおいては住む地域は民族ごとに異なるが同じ菓子やお茶を楽しむ日々を過ごしているという、民族という区別を超えたマレーシアに住む人々としての国民性の片鱗を垣間見ることができた。

参考文献

一般社団法人ハラル・ジャパン協会, n.d., 「ハラル認証について」, (2025 年 3 月 24 日取得, <https://jhba.jp/halal/certification/>).

外務省, 2025, 「マレーシア基礎データ」, (2025 年 3 月 24 日取得, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>).

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

同部屋だった私によく「オレオ」の話題を振っていた山下さんらしいエッセイだと感じた。「オレオ」という身近なお菓子が、多民族国家における共通項の一つとなっているかもしれないとの推測は興味深い。また、ハラル認証を経ることで、国内で多くの人に触れてもらえるように努力していることは意外だった。研修中のティータイムについては、私も様々なバックグラウンドを持つ参加者が打ち解ける貴重な機会だと感じていた。しかし、山下さんが指摘した「ティータイム文化」は、どのような契機で誕生したのか不明である。イギリスの植民地だった時代に持ち込まれたのか、それとも民族融和のために生み出されたのか。これは私の次なる関心となった。

約 40 円で病院に行けるマレーシアの医療制度

R.Yamada

はじめに

本稿では、マレーシアにおける医療保険制度を取り上げる。研修期間中にジョホール州政府の所在地である Kota Iskandar を訪れた際、現地の職員の方からマレーシアでは 1RM で病院にかかることができるという話を聞いた。1RM は日本円換算で約 40 円であり、破格の値段であるため素晴らしい制度だと感じた。1RM は現地人の感覚としても安く、電車での移動一駅分ほどの価格である。しかし、現地のバディに聞いてみると、良い点もあれば悪い点もあり、一概に良い制度と言えるわけではないと私に話してくれた。そこで、今回はこの制度を日本の医療保険制度と比較しつつ、良い側面と悪い側面の両方から考察し、是非を問うこととする。

概要

マレーシアでは、医療は基本的人権であり、すべての政府はすべての市民にアクセス可能な医療を提供する義務があるという前提のもと、医療費の自己負担額が実際にかかる費用よりも安くなっている。提供される医療サービスには、多くの場合、数十 RM から数百 RM までの費用がかかっているが、国民は政府の診療所への訪問に 1RM、専門医の診察に 5RM しか支払う必要がない (Codeblue 2019)。

それに対して、日本の医療保険制度では、病院での診療費は原則として一定割合 (自己負担) が求められる。自己負担の割合は、出生から小学校入学までが 2 割、小学校入学から 69 歳までが 3 割、70 歳から 74 歳までが 2 割、75 歳以降が 1 割となっている。また、高額療養費制度により、一定額以上の医療費がかかる場合は、自己負担額の上限が設定され、過剰な負担を避けることができる。この制度により、国民は経済的な負担を抑えつつ、必要な医療サービスを受けることができる(日本医師会 2023)。

良い点と悪い点

マレーシアの医療制度の良い点としてあげられるのは、幅広い所得層が医療にアクセスすることを可能にする点である。高額な医療にお金を支払う金銭的余裕がない人々に、負担を強いることなく病院を受診してもらうことができる。日本では大人は医療費が 3 割負担で安くないため、子どもの時に比べて病院への足が遠のいてしまいがちである。実際に、2023 年に行われた調査では、20~60 代の男女の全体の 57.6% が一年間病院に通っていないと答えている(マイナビ 2023)。一方で、研修期間中に現地のバディに聞いたところ、多くのマレーシア人は少しの不調や発熱でも病院に行くことが多いと話していた。破格の医療制度が実際に人々の意識に良い影響を及ぼしていると感じられた。

それに対して、マレーシアのこの医療制度がもたらす悪い影響も存在する。現地のバディに聞いたところ、値段が安すぎるせいで病院が混雑し、医療の質が低下することがあると話してくれた。また、実際にかかる費用と自己負担の 1RM との差額を税込で補っているため、国民の負担が結果的に大きいのではないかと考えられる。

考察

私は高校生の頃日本の医療保険制度について詳しく調べていたことがあり、国民の負担の大きい医療制度に課題感を持っていた。そのため、マレーシアという異国の医療保険制度について現地で現場感を持って知り、それについて考え、日本と比較できたことは貴重な経験であった。

上記のように、マレーシアの医療制度には良い点と悪い点がある。しかし、悪い点も見方を変えることができると私は考える。病院が混雑し過ぎてしまうのは本当に値段が安すぎることだけが原因なのか。病院不足や医者不足などの原因も考えられるのではないか。医療の質が低いのは病院が混雑していて手が回らないことだけが原因なのか。医者の技術や設備の不足などの原因も考えられるのではないか。よって、私は格安のマレーシアの医療制度を、その悪い側面から非とするのではなく、人権として医療へのアクセスを保証するためのシステムとして改善策を検討しながら継続して発展させていくべきだと考える。他国の状況や取り組みから学べることもあると知ることができたので、マレーシアの他にも多様な世界の医療保険制度について調べ比較してみたいと感じた。

参考文献

CodeBlue, 2019, “The One Ringgit Health Care System-Dr John Teo,” CodeBlue, (Retrieved March 24, 2025, <https://codeblue.galencentre.org/2019/06/the-one-ringgit-health-care-system-dr-john-teo/>).

セラピストプラス編集部, 2023, 「意外?! 60代以上 48.5%は一年一度も病院へ行っていない〜身体治療のアンケート調査結果」, マイナビコメディカル, (2025年3月24日取得, <https://co-medical.mynavi.jp/contents/therapistplus/lifestyle/beauty/14826/>).

日本医師会, 2023, 「日本の医療保険制度の仕組み」, 日本医師会ホームページ, (2025年3月24日取得, <https://www.med.or.jp/people/info/kaifo/system/>).

エッセイを読んだ他の参加者からのコメント

現地で経験に基づきながら、日本とマレーシアの医療制度を多面的に比較している点が興味深かった。単に「1RMで病院にかかる」という衝撃的な事実を紹介するだけでなく、その制度が持つ利点と課題の両面に丁寧に目を向けており、説得力があった。

一方で、「アクセスの良さが医療の質の低下を招いているのか?」という問いに対して、病院のキャパシティや医師不足といった構造的な要因にも目を向けていたのは鋭い視点だと

感じた。ただ、だからこそ、制度設計だけでなく、それを支えるリソースや人材の分布に焦点を当ててもよかったのではとも感じた。例えば、都市と地方での格差や民間医療との関係性など、もう少し「制度の中の不均衡」にも踏み込むと、発見が得られるかもしれない。

日本の制度との比較もわかりやすく、読んでいて自分の国の医療制度を見直すきっかけになった。私自身も医療の質と平等なアクセスのバランスについて、他国の制度と比較しながら考えてみたくなった。

マレーシア異文化交流研修 座談会

—フォレストシティ訪問を振り返って—

K.Fukaya, H.Isono, S.Nishina, N.Hamanaka

はじめに

これまでの報告書では、それぞれの参加者がコラムやエッセイを書くものが中心であった。しかし、同じ日程・行程であっても、そこから学ぶことや感じることは人によって異なる。そのため、参加者数人で同じテーマについて話し合えば、新たな気づきが得られるのではないかと、という考えのもと今年度は座談会を開催した。

そして、私たちは今回扱うテーマを「フォレストシティ」とした。なぜなら、SDGs について学びを深めるという研修の目的に深くかかわる施設であるからだ。なお「フォレストシティ」は、持続可能な未来都市をコンセプトとしてジョホールバル郊外に開発された都市である。(公式サイト：<https://forestcity-jb.com/en>)

フォレストシティの第一印象

H.Isono (司会) みなさん研修お疲れさまでした。今日は研修の際に訪問した経験を踏まえて、フォレストシティについて話し合いたいと思います。

まず簡単に、フォレストシティについての基本情報を復習します。これはジョホールの大規模なスマート都市開発プロジェクトで、中国の大手不動産会社が始動したものです。2016年に開発が開始されて、一応ほとんど完成しているといった状況の中、私たちは訪れました。シンガポールとの国境近くに位置していて、人工島を四つ埋め立てたところに、様々な施設などが建設されています。面積はおよそ30km²で、これは渋谷区と目黒区を合わせたぐらいの大きさです。現地に展示されていた、スマートシティ全体を見渡せる模型から分かる通り、結構大きいなという感じでしたね。



フォレストシティの完成模型。高層マンション群が立ち並ぶ。

現在の評価としては、環境に配慮した持続可能な都市を目指していながらも、ゴーストタウン化がみられたり環境に優しくないとの指摘があったりすることです。おさらいが終わったところで、私たちが実際に見て感じたことを話し合しましょう。

S.Nishina 私はバス移動の際に高速道路から目の前に急にビル群がそびえ立っているのが見えたので、フォレストシティはこんなに急に出てくるのかと圧倒されたというのが第一印象でした。

H.Isono 確かに、ジョホールの街はそんな高いビルがたくさんあるわけではなかったから、いきなりシンガポールのような雰囲気になったという印象を私も持ちました。

K.Fukaya ビーチは少し寂しめで、割と閑散としていたなと思いました。模型で見た感じと、実際に外に出て見る光景のギャップを感じました。



閑散としているビーチの様子

H.Isono 確かに。模型で見たときはものすごく最先端の都市だなという感じでキラキラして見えたけれど、実際にビーチに出てみたとき人がほとんどいなかったことがかなり印象に残っていますね。プールもハワイのような雰囲気がありつつも、実際に遊んでいる人は片手に収まるくらいしかいなかったように思います。

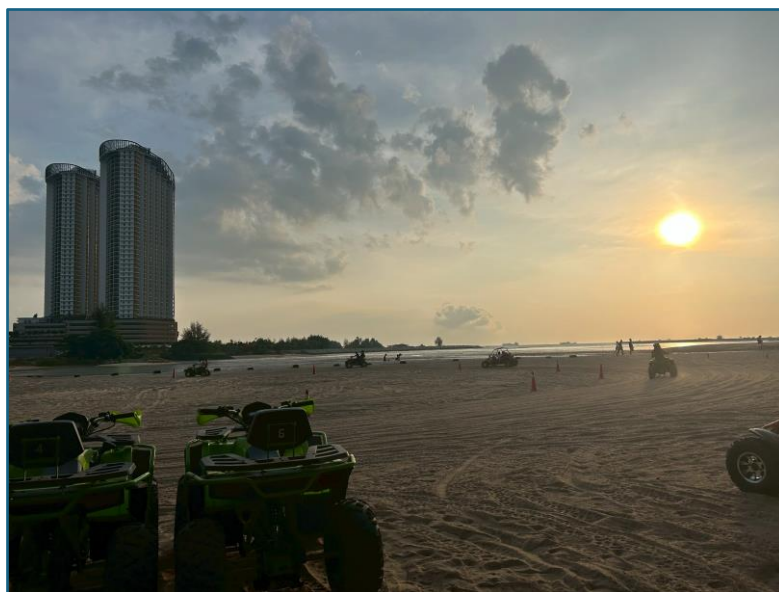
N.Hamanaka 人工感がとても強いというのが第一印象です。建物の周りの植物も観葉植物を頑張って並べたように感じられて、「フォレストシティ」という名前にもかかわらずフォレスト感はあまり無いなと思いました。

H.Isono 確かに、人工感はすごくわかります。実際、埋め立て地だから、その土地自体が人工でしかないと思うのですが、日本の「地方」に行った時に感じるような落ち着く感じはなかったですね。

※編集追記

座談会の中ではフォレストシティと日本の地方とを比較したが、ここで同じマレーシアのマラッカのビーチを比較対象として見てみることにする。研修中に訪れたマラッカのビーチは、埋め立てや植樹などの手を加えず、自然にできた地形や生態系を生かしたものであ

った。ここには食販の屋台やゴーカートなど訪問者が楽しめるようなアクティビティが用意されており、私たち以外にも人がいて賑わいを感じた。過度に開発の手を加えられていない自然な雰囲気や、訪れる人の賑わいから、フォレストシティと比べるとリラックスできる空間であるように感じた。



マラッカのビーチ。手前に写っているのは砂場で遊ぶためのゴーカートである。

印象的だった場所

H.Isono 次に、特に印象的だった場所か施設はありますか。

S.Nishina 浜辺に動物がいるなどと思ったら、ただの巨大なカニとアザラシのオブジェだったことが印象に残っています（上記写真「閑散としているビーチの様子」より）。これは、現地での講義で立命館大学の教授が指摘していた、フォレストシティ建設による生態系の破壊という点に繋がると思いました。オブジェでしか動物を示せないというのが、この都市の限界を自分で見せてしまっている気がしました。

K.Fukaya あのオブジェは観光名所になりそうなわけでもなく、なんとなくあるなという感じはしましたね。あまり存在意義はわからないなという印象でした。

H.Isono 確かに。マレーシアという南国の地にもかかわらず、いきなり高緯度地域にこのようなアザラシのオブジェが出てきて、私も違和感を覚えました。

N.Hamanaka 私はビーチが印象に残りました。ココナツの木があってトロピカルビーチみたいな雰囲気がすごく素敵だなと思ったのですが、実際に海に近づいてみると水が汚くて、バディさんも汚いから入らないようにと注意していたのを覚えています。

H.Isono 確かに、シンガポールと近いこともあって、海の向こうに水平線が見えて自然をダイレクトに感じられるリゾートとは違いましたね。対岸にシンガポールの工業地帯みたいなのが見えるというのもビーチ側のリゾートっぽさとのギャップが強いと感じました。



リゾート感のあるビーチだが、奥に見える海は濁った色をしている

フォレストシティが生む環境保護の効果

H.Isono 様々な感想を聞いたところで、一步踏み込んでフォレストシティの「環境に優しい都市」というコンセプトについて話し合いたいと思います。

私は、ビルの周りなど随所に緑が多かったという点から、環境保護という概念を広めていく宣伝効果はあるかなと思いました。これはあくまでも反実仮想的な話なのですが、有名人がフォレストシティを購入して発信したりしたら、自然を守りながら都市を築いていくという概念自体が広まるきっかけにもなったかなと思うので、そういう意味では効果があるプロジェクトだったのかなと思います。ただ、いい面だけではないというのも事実かなと思っています。

N.Hamanaka 建設費や投資額に省エネ効果がかみ合っていないのではないかという印象を受けました。購入者が少ないということは事実で、実際に訪問してみてもほとんど人はいませんでした。人を呼び込めていないということはせっかくの省エネ効果も発揮できていないので、かけた費用に対してリターンが見合っていないのではないかと思いました。

※編集追記

フォレストシティの住宅は現在約 10 万人が居住できる規模であるが、実際は 9000 人ほどしか住民がいない状態である (Anders 2023)。この状況で費用に見合った省エネ効果を発揮できているとは考えづらい。

K.Fukaya 自分たちが見た一部に限るかもしれませんが、(フォレストシティが) あまり環境に優しそうには感じられないなと思いました。植物園のようなものを私は期待したのですが、実際はスマートシティみたいにメーターで電力消費とかを管理するようなシステ

ムチックなもので予想と違いました。

H.Isono 確かに、建物と緑の割合で言ったら圧倒的に建物の方が多いという印象を私も持ちました。

S.Nishina 当然かもしれないですが、数値で削減効果のアピールが行われていたなと思いました。ただモデルルームを見る限り、富裕層向けであると感じられて、そういった人達に訴えかけられないとゴーストタウン化を避けるのは厳しいのではないかと思います。

H.Isono 購入者一覧を見たところ日本人も購入していましたが、私はマレーシアに行くまでフォレストシティの存在を知らなかったの、宣伝効果はまだ発揮できていないのかなと思いました。

ゴーストタウン化の要因

H.Isono では、次の話題にいきたいと思います。今話に出た通り、フォレストシティは建設したものの、購入者が多くないということで、ゴーストタウンになりつつあると言われています。なぜゴーストタウンになってしまったのかということについて話し合しましょう。

少し調べたところ、値段設定が高すぎるというのが一番大きいのかなと思っています。マレーシアに建設したものの、もちろんマレーシアの人たちで買える人というのはすごく限られてきますし、元々ターゲットにしていた中国の富裕層の反応も想定より良くなく、購入者数が少ないという現状があるそうです。実際に行ってみて、なぜみんな買わないのかについて、皆さんはどう思いますか。

K.Fukaya すごくハイテクかと言われるとすごくハイテクではないし、すごく自然豊かと言われるとそうでもないというように、ここがすごくいいから住みたいとなる決め手が欠けているのかなと思いました。

H.Isono 良い視点だと思います。フォレストシティの魅力を高めるための方策としては教育の充実が挙げられます。学校を充実させようとしているそうで、それこそインターナショナルスクールを建設しているという情報を見つけました。おそらく富裕層の家族連れのファミリーをターゲットにしていると思うのですが、自分に家族ができたときにフォレストシティに引っ越したいかと言われたら、私はあまり引っ越したいとは思えなかったです。その理由は過剰な人工感と街に人がいないことです。そのように考えると、一度ゴーストタウン化してしまうと、さらに人が来なくなるという負のスパイラルになってしまいそうですね。

N.Hamanaka フォレストシティ自体の魅力について以外の点でいうと、立地が良くないと思いました。フォレストシティの周りに何もなくて、地形的に独立しているので、買い物するにしても、どこに行くにしても不便そうでした。このように悪い地理的条件が、住みにくさを生んでいるのではと考えました。

H.Isono フォレストシティの展示を見たところ、病院や生活に関わる施設の全てをフォレストシティ内で完結させるとされていましたが、それが更に孤立感を高めてしまうという

面はあるかなと思いました。

今後の展望

H.Isono 最後に、フォレストシティの今後について話してみたいと思います。私としては実際に住んでもらうという前提を見直して、観光地化を目指すべきだと考えます。具体的には、大きなテーマパークのような形にして住人はいないが来客はあるというような状態にすることです。

S.Nishina 住人を呼び込めなかった原因におそらく新型コロナウイルスの存在があったと思います。現在では感染の拡大や重症化のリスクが低下しているので、これから新規顧客を獲得できる可能性はあるのではないのでしょうか。

H.Isono このプロジェクトは 2016 年に開始されたのち、コロナ渦により一度計画が頓挫しています。コロナがおさまった今からどうなっていくかというのも注目ですね。みなさん今日はありがとうございました。

※編集追記

座談会の中で「今後のフォレストシティはどうふるまうべきか」という話題について、観光地化という意見が出たものの、深く議論ができなかった。そのため追記として、これに関するより具体的な考えを述べる。マレー系民族の文化を体験できる施設を設けるなどして、主に海外からの観光客を誘致するということを例として考えられる。ここで多くの国や地域からの観光客の対応のため、複数民族を雇用し多様な言語に対応するようにできればよいのではないだろうか。だがその場合も、30 平方キロメートルの広大な土地を完全に活用することは難しいと考えられる。上の議論で上がっているように、コロナ収束に際して居住者獲得を目指したり一部の土地はホテル化したりするなど、複数の案を統合してフォレストシティの広い敷地を有効活用していく必要がある。

参考文献

Forest City 公式サイト，（2025 年 5 月 6 日取得，<https://forestcity-jb.com/en>）。

Anders Melin, 2023, 「ゴーストタウンか理想郷かー碧桂園の 1000 億ドル事業,先行き見えず」, Bloomberg, 2023 年 8 月 30 日, （2025 年 5 月 6 日取得，<https://www.bloomberg.co.jp/news/articles/2023-08-30/S04O4HDWRGG001>）。

Malay Dragon , 2023, 「樂園がゴーストタウンに マレーシアの「フォレストシティ」」, 海外情報ナビ, 2023 年 11 月 8 日, （2025 年 5 月 6 日取得，<https://global-biz.net/southeast-asia/malaysia/forest-city-report-my/>）。

次回以降の研修参加者のための Q&A

M.Irie

Q：参加費以外に用意すべき金額はいくら程度か？

A：割り勘の機会が多いため現金は余裕をもって 5～6 万程度持参し，お土産など自身で購入する分はクレジットカードで支払うといいだろう。ただし多額の現金を持ち歩くのは危険であるため現地で引き出せるキャッシュカードを用意しておくより良い。クレジットカードは屋台などを除き基本的に使用できるが，ごくたまにマスターカードのみ利用可能な店舗があった。また両替については，現地でレートの良い換金所に案内してもらえるため日本で行う必要はない。

Q：携帯電話のネット接続はどうすればよいか？

A：ホテルや UTM の宿舎，空港では Wi-Fi が利用可能である。モバイルデータ通信については，日本または現地で SIM カードを購入した人が各 3 人程度，日本で eSIM を購入した人が 5 人程度であった。万が一の場合に備えて現地で利用できる電話番号付きのものを推奨する。

Q：研修中の食事はどのようなものであったか？

A：ホテル・宿舎どちらにもキッチンが備わっておらず，基本的に昼食と夕食は外食で，朝食は前日にコンビニで菓子パンやヨーグルトなどを購入して部屋で食べた（クアラルンプールのホテルのみ朝食ビュッフェが付いていた）。マレーシアの食事は辛く脂っこいものが多いが，ほぼ毎回バディに相談して自分の好みに合ったメニューを選ぶことができる。体調が優れない場合は，部屋で持参したインスタント食品を食べることも可能であった。

Q：マレーシアの治安はどうであったか？

A：全く心配する場面がないほど治安は良かった。常にバディと行動するため，彼らの話を聞いておけば安心である。ただ，海外旅行の基本としてパスポートや現金の扱いは厳重にしたい。

Q：ホテル・UTM の宿舎の設備はどうであったか？

A：クアラルンプール・マラッカでは 2 人一部屋のホテルに宿泊した。ジョホールバルの Scholar's Inn は 4 人一部屋で，広いリビングと寝室 2 部屋が付いている。電気ケトル，冷蔵庫，タオル，マグカップ・スプーン，食器用洗剤・スポンジは備え付けられている。また，

トイレトペーパー、箱ティッシュ、シャンプー・ボディソープは用意されているが、使い切ってフロントで購入する場合は有料である。ドライヤーと電子レンジはないので注意してほしい。

Q：最終日のシンガポールに向けて準備すべきことはあるか？

A：今回、シンガポールに滞在した期間は半日のみであった。筆者は現地で一日分の eSIM を購入したが、eSIM・SIM カードを用意していない参加者も多かった。空港では Wi-Fi が使えるため、迷子にならないよう気を付ければ必要ないかもしれない。また通貨についても、ほとんどの店舗でクレジットカードを使用できるため両替はしなくてよい。

Q：忘れがちな持参すべきものは？

A：各種薬（体調不良になったり辛い料理でお腹を壊したりする参加者もいた。説明書も一緒に持参すること）、ウェットティッシュ・アルコールスプレー、インスタントの味噌汁等、割り箸、ゲームカード（毎晩 UNO で大盛り上がりした）、レターセット・メッセージカード（バディや同じグループの参加者などに向けて手紙を書く人が多かった）

Q：部屋の虫対策はどうすべきか？

A：以下、自室に一切の虫を寄せ付けなかった参加者からのアドバイスである。

①ゴキブリ対策にコンバット（レギュラーサイズ：小さめだとマレーシアのゴキブリのサイズには小さすぎるため）②ベッドおよび部屋のカーペットのダニ対策にダニ/虫避けミスト（自身が吸い込むことも考えて、体にかけられる優しいもの）③蚊などの小さな虫対策に虫除けネットの吊るすタイプ（ドアノブや窓際に置いて部屋への侵入を防ぐ）④殺虫剤（現地購入）⑤蟻およびゴキブリ対策に隙間テープ（台所の穴や窓の隙間からの侵入を防ぐ）

Q：お土産として何を持っていくべきか？

A：日本のお菓子（抹茶味など）は万人受けしていた実感があるが、ムスリムのバディや参加者に渡す場合は原材料に注意してほしい。また、今回の研修では大連大学の参加者が我々にもお土産を用意してくれていたということがあったため、多めに持っていくのが無難である。

Q：渡航前に自主的に勉強しておくべきことはあるか？

A：英会話を少しでも練習しておくのと役に立つのはもちろんだが、マレー語の簡単な挨拶（例：ありがとうは“Terima kasih”など）を現地でバディや店員に使うと喜んでもらえるため、より円滑なコミュニケーションに繋がるだろう。また、マレーシアの国教であるイスラム教の慣習や現地で接する人々の国のマナーについても頭に入れておくのが安心である。

あとがき

国際教育交流センター 講師 塚田英恵

2024 年度の異文化交流研修（春季・マレーシア工科大学）には、海外の文化や人々との交流を消費するような知的観光に関する見解を問う選考を経て、批判的意識や意欲の高い 11 名が集まりました。そして、渡航前授業では、見知らぬ地マレーシアでの生活への不安と期待に胸を膨らませながら、学部や学年の垣根を越え、参加者それぞれの個性や強みを活かし合ってグループ・リサーチや英語でのグループ発表の準備に取り組みました。

この研修報告書には、そうして迎えたマレーシアでの 3 週間の研修を通しての参加者それぞれの学びや成長の記録が刻まれています。今年は、参加者たちのアイデアによる新企画で内容もより充実し、編集委員の皆さんのご尽力のおかげで読みやすい報告書に仕上がりました。完成した報告書を読みながら、参加者の皆さんがいつか将来この報告書を読み返す時、この研修を振り返って何を思うのだろうか、そして皆さんはその時どこでどのような活躍しているのだろうかと期待まじりの思いを馳せずにはいられませんでした。

そして、参加者たちがこの研修を通して豊かな成長を遂げることができたのは、多くの皆様の支えがあつてのことです。マレーシアで参加者たちを 3 週間にわたって昼夜を問わず見守り、お世話くださった、マレーシア工科大学の Lee 先生と Ong 先生をはじめとする先生方およびバディの皆さんには、感謝の言葉を尽くしても尽くしきれません。また、昨年に引き続きクアラルンプールでは、如水会クアラルンプール支部の皆様にたいへんお世話になりました。本学からの参加者のみならず研修関係者一同を迎え入れてくださった同支部会員で Panasonic Manufacturing Malaysia 代表の杉原尚様およびラボのスタッフの皆様方、そして、私どもの訪問に向けてのコーディネートや細やかなお心遣いを下さった同支部代表幹事の中島薫様に深く感謝いたします。そして、今年も UTS の上野様の旅行手配のおかげで、安心して参加者たちを渡航させることができました。

私がこの研修の担当をさせていただくのは、今年が三度目でこれが最後となりました。右も左も分からず始めた 1 年目から私自身もここに記しきれないほど多くの学内外の方々に支えていただきました。皆様方にこの場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

連日の猛暑で地球温暖化を実感する中、世界各地の紛争はやまず、日本国内においても外国人排斥の言論が拡大するなど、この世の中の将来を思うと心がざわつくような日々が続いています。本研修参加者の皆さんが、この研修での経験をただの楽しい思い出として終わらせたり、自分が社会で勝ち進むためだけに使ったりするのではなく、このような貴重な学びの機会に恵まれたことや、お世話くださった方々への感謝の気持ちを忘れずに、誰もが安心してともに暮らしていけるような未来の構築に活かしてくれることを願ってやみません。そして、そう信じて本研修の報告書を締め括らせていただきます。

2025 年 7 年 一橋大学国立キャンパスにて